
伝説の刀鍛冶物語外伝～刀を継ぐもの～

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の刀鍛冶物語外伝（刀を継ぐもの）

【Nコード】

N9499S

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

あの伝説から十三年。伝説の刀鍛冶の息子“カイル”ブリュンヒルデ”が立つ。少年よ、正義を貫け……！！

第一章「刀を継ぐもの」

ある日の夜。断崖の先。

「さて、始めようか」

人影が一つ。

「新たな伝説を――」

暴れ出す。

全身を包む外套。海。陸。そして、空。

暴れ狂うその景色をつんざく、一筋の光が打ち上げられた。
空は光によって切り裂かれる。

エンゼルダスト。

後にそう呼ばれるようになった自然災害から早八年が経つ。
物語は、そこから始まる。

001

東大陸イーストの田舎町。

自然と一体になって生活するその町に、有名な刀鍛冶がいた。

その刀鍛冶の名はロイ。ロイⅡブリュンヒルデ。大罪人を父に持つこの男、かつては多くの仲間と共に世界を救ったりもしている。

その伝説の男を支えるのが、エリスⅡブリュンヒルデ。ロイの妻である。

二人は十三年前、エンゼルダストより五年前のことだ。

一人の子を授かり、無事に出産した。

子の名はカイル。カイルⅡブリュンヒルデである。

カイルは小学校を卒業したばかりだ。来年から十三歳となり、中学生となる。

エリスいわく、カイルは駄目だ、らしい。

というのも、カイルは反抗期なのか最近のエリスの言うことをきかなくなってしまうて、日課だった稽古や刀鍛冶の仕事などもずいぶんサボってて、挙げ句の果て『俺は刀鍛冶が嫌いだ』とまで言っている始末。

間抜けでも根はしっかりとしていた性格のロイと比べると、確かに駄目だと思う。

まあ、偉大なる父と比べるのは少々可愛いそうではあるが。

そんなこんなでカイルは遊んでばかりだ。

今日もクラスメートのエリシアと遊んでいる。遊ぶというか半ば世話をしていると云っていい。

ちなみに田舎町なので、都会的な遊べる場所はなく、自然の中で遊んでいる。

お気に入りには小学校の裏側にある森。エンゼルダスト跡地だ。

有刺鉄線の囲い。高さは三メートルくらい。立ち入り禁止の札が立てかけられているのだが、真つ二つに割られている。

その中――枯れ葉が散りばめられた哀愁漂う森がある。

そこに、黒髪の少年と金髪の少女がいた。カイルとエリシアである。

カイルは普段着を、エリシアは外で遊ぶには不適切な白いワンピースを着ている。汚れたら大変だ。

ちなみにカイルの黒髪は父親譲りだ。と言っても、カイルの黒髪は純粹無垢な黒ではなく、僅かに紫がかった、宵とでも言うべき色をしている。

髪も男にしては長いし、日々の稽古が実ってか同年代相手では喧嘩は負け知らずだし、そんな理由からウルフヘッドなんて呼ばれたりもする。本人はダサイからやめろと言ってるが。

カイルとエリシアは腰を下ろし、辺り一面の枯れ葉を掻き分け、探し物をしていた。

「見つからないね」

毎日のように探してはいるが、やっぱり見つからない。

「おっかしいなあ。エンゼルダストはここにも落ちたはずなのに」
エンゼルダスト。八年前に世界数ヶ所を襲った自然災害だ。

星のような光の塊が飛来し、大小様々な被害をもたらした。

その光の塊、実は未だに一つも発見されておらず、エンゼルダストがいかにして起こったのかなど、そのおよそ全てが解明されておらず、――故に、エンゼルダストに関する情報はどんな些細なものでも高値で取引されている。

光の塊なんて発見すれば、それはもう高値どころの騒ぎじゃない。
国の一つや二つ余裕で買えるくらいだ。

そこでカイルとエリシアの二人だ。二人は別に金銭を目的としてはいない。もちろん貰えればそれは嬉しいが。

二人の目的は、他に、別にある。

枯れ葉を掻き分けていたエリシア。

「あー！」

急にはしゃぎだした。

「おっ！　もしかして見つかったのか！？」

光の塊が見つかったものだと思います、ザックザックと枯れ葉を踏んでエリシアに駆け寄る。

脇から覗き込む。エリシアが掻き分けたそこには、少なくとも光るものはなかった。

「見て見て！　プチトカゲがいるよ！」

きゃっきゃつと騒ぐエリシア。彼女を喜ばせるその名はプチトカゲ。いわゆる爬虫類の仲間なのだが、その面影を感じさせないくらい、非常に愛くるしい姿をしたトカゲである。マスコットキャラクターやぬいぐるみなどのグッズとしても人気が高い。

「……………」

はしゃぐエリシアとは対照的に、カイルは物凄く不機嫌そうだ。
きゃっきゃつと騒ぐエリシアに段々腹が立ってきたカイルは、いよいよとばかりに手を出した。

ちっこい頭をコツンと一発。軽くやったつもりだ。

「痛いよー、カイルー」

虫すら殺せないであろう軽い一発に情けない声を上げるエリシア。挙げ句プチトカゲに逃げられた。

「痛いよじゃねえ。なに子供みたいにはしゃいでんだよ」

「だって、まだ私達、子供だもん」

「だもんじゃねえ。つーか、俺はエリシアと違って大人だ」

「でも、カイルいつも給食の牛乳残してるよ？」

「ばっ、俺は大人だから牛乳なんて飲まないんだよ。大人はコーヒーを飲むんだ。砂糖の入ってないやつな」

「お砂糖入ってないの!？」

「そうだ。だから凄く苦い。でも俺は飲める。――なっ、俺は大人だろ？」

「うんうん！ カイルはもう大人だ!」

カイルに憧れの視線を送るエリシアであった。

「――あっ、じゃあ、お酒も飲めるの？」

作業を再開した二人。たわいない話を続けながら。

「あれは駄目だ。コーヒーと違って二十歳を過ぎないと飲めないからな。大人の中の大人だけが飲める代物だ」

「二十歳かあ……後七回誕生日こないと駄目だね」

「エリシアはまずコーヒーを飲めるようにならないとな」

「じゃあ、カイルは牛乳を……」

「牛乳はいいんだよ!」

「牛乳飲まないと、背大きくならないんだよ」

カイルの背は低い。百五十ちよいくらいだ。同年代の男にしては低い方。危うくエリシアに抜かれるところだ。

「俺は後から伸びるの。――ほらっ、さっさと探すぞ。あんま遅くなるとエリスの奴がうつせえからな」

「あー!」

さっきと似たような声。カイルは呆れている。仕方なく相手して

いるようで。

「もういいよ、プチトカゲは」

「違うよ。あれ見て」

と言って、エリシアは岩壁の上ら辺を指差した。

ゴツゴツと凹凸の激しい岩壁。

太陽光に反射して光る、自然の輝きが見えた。燃えるような輝き。死なない光だ。

「あれって、もしかして」

「かもしれない」

カイルは見る。ざっと十メートルくらいか。凹凸をうまく使えば登れないこともない。

「よし、やってみるか」

002

「危ないよー、カイルー」

カイルは器用に岩壁の凹凸を利用して登っていた。

昔はよく、基礎体力作りがてら、木を登っていた。そのおかげもあって登るのは慣れたものだ。

カイルは難無く光の塊付近にまでついた。しかし、思ってた以上に腕の筋肉を使う。

（サボってたツケってわけか）

下から見守るエリシア。

「危ないからよそうよー」

「大丈夫だって」

あと少し。あと少しで――その時だった。

カイルの手が岩壁から外れた。

「!! カイル!」

カイルは光の塊に手を伸ばし、しっかりと掴んだ。一安心したエリシア。

しかし、光の塊は根元から折れ、支えるものを失ったカイルはそのまま十メートル下まで転落してしまった。

ドスンと森に響く音。野鳥が一斉に飛んでいった。

「いてて……」

「大丈夫！？ カイル！」

「ああ、何とかな。――枯れ葉がクッションになってくれたみたいだな」

ホッとするエリシア。自然と表情にも安堵がこぼれる。

「……！ カイル、膝から血が出てる！」

「ん？ ああ、こんくらい平気だよ」

と言うカイルだが、結構深く切っている。出血量は平気のレベルを超えている。

見かねたエリシアは、カイルの膝に両手を当てた。

「ばっ！ “それ”は使うなって……！！」

目を瞑り、神経を集中させる。

すると、エリシアの両手から優しい白い光が溢れ出た。見るだけで癒やされる、そんな心安らぐ光だ。

光は治癒力に長けているのか、見る見るうちにカイルの膝の傷を、更にはそこから流れ出た血や破れたズボンまでも、完全に修復させてみせた。

ふらっとエリシアの体がよろける。カイルは支えの手を差し出すが、大丈夫なようだ。

「平気だよ。今日はいつもより調子がいいんだ」

「平気なのは俺も一緒。むやみに天魔を使うなよ。天魔は災いをもたらすんだから」

天魔とは、いわゆる魔法や魔術と言った類のもののこと。

一般生活でも使われたりするが、そのほとんどが戦闘道具として使われている。

あまりいい噂をきかないので、カイルは天魔を悪く見ているのだ。
「ごめん……」

「俺の為を思ってたってくれたんだろ。だったら謝るなよ」
「う、うん」

「まあ、でも、エリシアの体を治す為にコイツを探してんだから、あんま無茶すんなよな」

二人が光の塊を探す理由は、金銭目的ではなく――

エリシアの体を治す為なのだ。

003

エリシアは生まれつき体が弱いらしい。そのせいか、いつも出遅れている。

友達と遊ぼうにも、後ろを付いていけない。

そんなことから、いつしか遊びに呼ばれなくなった。

孤立したエリシア。クラスメート一人一人に話しかけるも無視されたりと散々な目に。

そんな中、カイルだけは相手をしてくれた。

カイルも最初な変な奴だなあ、と思っていた。

というのも、カイルもまた孤立していたからだ。

偉大なる父を持つカイルへの、周囲への期待値は高く、故にプレッシャーも大きかった。

カイルはそれが次第に嫌になり、そしてついに――ロイが家を出ると、不満が爆発してしまった。

カイルにしかわからない苦悩を周囲が理解してくれるわけもなく、カイルが孤立されるのも自然の節理だった。

そんな自分に話しかけるなんて変な奴だ、とカイルは思ったのだ。

最初はそう思っていたが、話していくうちに気が合い、いつしか仲良くなっていた。

それを決定付けたエリシアの一言がある。

仲良くなるにつれて、お互いの胸中を告白するようになった。

カイルは不満を告白すると、エリシアはこう言ってきたのだ。

『カイルはカイルだよ』

そう、エリシアはカイルを一人の人間として見てくれている。

偉大なる父の肩書きなんて関係ないと言ってくれたのだ。

そんなことを言ってくれたのは、エリシアが始めてだ。

それがきっかけとなり、カイルはエリシアと共にするようになった。

その時である。

エリシアが白い天魔を使えると知ったこと。また、それが原因で体が弱くなったのを知ったのは。

色々と話を聞いていくにつれて、分かったことが一つだけあり、

それが、八年前のエンゼルダストにつながるのだ。

どうやらエリシアのこの白い天魔が使えるようになったのは、エンゼルダストがあつてからだそうだ。

それを知ったカイルは、巷の噂で聞いた『光の塊は万能の薬』の説を信じ、日々、こうやってエンゼルダスト跡地である森を探索してたのだ。

004

ようやく見つけた、とカイルは感慨深い気持ちでいっぱいだった。折れてはしまったが、それでもケータイ電話くらいの大きさはあ

る。

問題はこれをどうすればいいかだ。

透かしたり振ったりと色々試してはみるが、一向にそれらしい反応はなく、これではただの光る石だ。

「何も起きないね」

「うーん、万能薬説は嘘だったのか？」

何か他に手段はないかと考えるカイル。

と、そこへ、足音が一つ。

クシャ、という枯れ葉を踏む音。二人は振り返る。

「……なんだ、こいつ？」

そこには、黒い外套で全身を包み込む怪しい者がいた。

自然と高まる警戒感。直感的に危険人物と判断したカイルはエリシアの少し前へ。

「見かけない格好だな。セントラルの奴か？」

「……………」

「って、無視かよ。……まあいいや。ここは関係者以外立ち入り禁止だぜ。早く出てった方がいい——」

ぜ——言葉を言い切る直前。

スン、という風が一つ。

カイルの体に飛んできた。

目線は自然と下へ。懐へ。

（いつの間に——！？）

十メートルあったであろう距離。

その間を一気に詰め寄った危険人物が——

カイルの懐にいた。

ゾツとしたのも束の間。

中段からの蹴りがカイルの腹部を襲った。

「ぐっ……」

体感したことのない痛み。カイルの体は紙のように軽く吹き飛ばされた。

「カイル！」

カイルは岩壁に当たる寸前で止まった。しかし立ち上がれない。頭がクラクラする。

駆け寄ったエリシアが白い天魔を使おうとしたが、カイルは首を横に振って拒否した。

小声で、告げる。

「力を使うな。——あいつ、何かヤバい臭いがする」

「先生を呼ぼうよ」

「駄目だ。そんな余裕ないし、第一、呼んだらせつかく見つけた光の塊が持ってかれちまう……!!」

「でも、そしたらカイルが！」

「俺のことはいい。それより絶対に力を使うなよ。——俺の直感が正しければ、あいつはエリシアの力を狙っている」

何とか動けそうだ。

「……エリシア、その棒を貸せ」

と言われて、エリシアは脇に落ちてた木の棒を拾って、カイルに渡した。

「これであいつの相手をする。その間にエリシアは逃げろ」

「無理だよ……！」

「——いいから早く行け！」

カイルはエリシアを突き飛ばした。そこに落ちてくる危険人物の刃。あれは——“刀”だ。

間一髪でよけたエリシア。近寄ろうにも近寄れない。

カイルは柄と腹を押さえ込み、何とか止めている。

「……っ、早く行け！」

「……っ」

やりきれない気持ちでいっぱいだった。

エリシアは背を向けて駆け出す。

その途中で何度もこけそうになった。

やりきれない気持ちでいっぱいだけど——

私は、何もできないから。

第二章「傷だらけの戦い」

危険人物を押さえ込むカイル。その手と足に妙な違和感を感じていた。

（異様に固い……）

それこそ鉄板でも踏んでいるような固さだった。

（鉄板……）

割と強めに足に力を入れる。やっぱりだ。

「お前、機械だな？」

核心をつく一言。それが開戦の合図となって、二人に距離を与えた。

睨み合う二人。攻撃の機を待ちながら、相手の隙を見る。

木。カイルは不利と分かっているのに、なるべく物陰に隠れることを念頭に置いて、移動を試みた。

次第に離れていく距離。あまり後ろに行き過ぎると岩壁に追い込まれる。

（親父の稽古がこんなところで役立つとはな）

しかし、このまま睨み合っても埒はあかない。

斬り合いに持ち込まれるのは時間の問題。そうなったら今度こそおしまいだ。

出入り口までの距離を確認。ざっと二十メートルくらい。

（走れるか？）

考えていたそこに、敵の影。

まずい———そう思った時には敵の刀が振られていた。

打ち上げるように、グイッと。

とっさに切り出した木の棒はまったく活躍することなく折れ、カイルは傷を負った。

「いてええええ！！」

顔、それから腕にも少し。

のた打ち回りたくなるような痛さ。脈拍やら心拍数やら体が痛みと共に危険を知らせている。

ヤバい。殺される。

「うわああああ!!」

カイルはへっぴり腰になって逃げ出した。

馬鹿になった筋肉は伝達信号を無視した動きをして、カイルを何度も躓かせた。

あたふたしているカイルを追うことなど、敵にとっては容易なことであり、生命線とも言える間を一気に詰め寄せられた。

すかさず斬る。運良く転倒して避ける運びとなったカイルだが、次はない。

動転して立つことさえできなくなったカイルは、格好構わずに這い這いで移動した。

それでも敵からすれば、蟻が移動してるも同じ。止まっているに等しく見える。

(死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない——!!)

敵の、一撃。

終わった。そう確信したカイルは強く生きることを念じていた。

長い時間、いや、実際は一秒もない時間が明けた時。

呼吸をしていた。

(死んでない……?)

冗談だと思いながらも、どうやらそういうことみたいだと認識した。

生きてる。

では何故、生きているのか。

それを問い詰めていくと、ある一つの異変に気付いた。

敵の動きが止まっているのだ。今すぐにでも斬り抜くであろう形のまま。

「どうなってんだ……?」

故障でもしたのか、と最初は思った。

しかし、この危機的状況の中で存在を強く主張するそれに気付いた時、これだ、と確信した。

光の塊である。

「……そういうことか」

どうやらこいつの狙いはこの光の塊のようだ。

そしてたぶん、こいつには光の塊を傷つけないようプログラミングされてるのだ。それなら一連の攻撃停止にも辻褄が合う。

しかし、それなら好都合だ。

カイルは光の塊を見せびらかしながら、ゆっくりと敵に接近し、必要な距離まで近寄ったところで、――敵の刀を奪った。

「ひっでえ刀だな。どこの安物だ？」

まあいいや、とカイル。

「何の目的があってコレが欲しいのか知らねえけど……」
振り抜く――

「コイツだけは誰にも渡さねえ!!」

固い装甲を一斬り。

スパツと外套が破れ、包み隠されていた鉄の体に、一筋の光を見た。

胸から腰にかけて、一つ。

ピシピシと電流の音がしばらく鳴っていると、電源が切れたのか、赤い眼光が消えた。

どうやら死んだらしい。いや、壊れたと言うべきか。

何にせよ、倒したことに違いはない。

「た、助かった……」

カイルは腰を抜かしたように地面に倒れ込んだ。

枯れ葉を踏む感触と同時に、手にゴツゴツとした岩肌のような感触を覚えた。少し痛い。

だが、コイツに助けてもらったのだ。

「ありがとうな」

自然と礼が口に出た。

物に礼を言うなんて初めてだと思いながらも――
カイルは、光の塊に感謝の意を捧げていたのだった。

005

二人が通う小学校の通学路。自然に囲まれたその道にエリシアはいた。

隣にいる緑色の髪をした女性は、カイルの母のエリスだ。

エリシアはエリスに助けを求め、何キロも離れたそこまで、体力もないのに走っていったのだ。

話を聞いたエリスはエリシアを連れて急いで助けに向かった。

――しかし、その必要はなかったようだ。

「カイル！」

カイルが足を引きずって帰ってきていた。顔や右腕には血が。

「エリシア、バカお前、誰も助けなんか呼んで……」

パシンッ！

エリスはカイルの前に立ち、頬を打った。

打たれたカイルは呆然としている。最初は何故叩かれたのかが分からなかったのだろう。しかし、その表情が暗くなると、意味を理解した。

「あそこの森は立ち入り禁止だったはずでしょ」

見かねたエリシアが仲裁に入る。

「違うんです、おばさん！ カイルは私の為に……！」

「――言うな！」

と、強く叫んだカイル。その顔の傷がぱっくりと割れ、宴会芸のようにピューと血が噴き出た。

「いてえええ!!」

「うわわ、カイルの顔から血が……!!?」

本当はもっとしっかりと叱ってやるつもりだったエリスだが、そんな気分でもなくなった。本気で怒ってる自分が馬鹿らしく思えてくるくらいだ。

エリスは悩ましげに頭を押さえ、大きく溜め息をついた。

「はぁ……とにかく無事ならいいわ。傷が残ると大変だから、早く家に帰って手当てしましょ」

006

「いてえええ!!」

本日三度目の絶叫。

消毒液を染みらせたガーゼをピンセットでつまみ、それで傷口に当てられたカイル。今日一番の絶叫がこぼれた。

隣で見守るエリシアの顔もあまりの絶叫に青ざめている。

「騒ぐな。みつともない」

手当てを終えたエリスは救急箱に道具をしまい、机の真ん中あたりに置いた。

キッチン兼食卓のその場所。狭苦しいそこには机が一台と椅子が四つある。そのほかキッチンに必要な家電や道具などが主に壁側に配置されている。

エリスはキッチンに立ち、冷蔵庫からアイスコーヒーを取り出した。

用意した二つのコップにそれを注いでいると、

「私は子供なのでコーヒーはまだ……」

「あら、そうなの?　じゃあ、牛乳を用意するわ。――カイルは砂糖二つでいいのよね?」

おや、というエリシアの顔。カイルはあえて顔を逸らす。

「入れたきゃ入れていいぜ」

「はいはい」

エリスは適当にあしらって、いつも通りに砂糖を二つ入れた。

飲み物を用意したところで、エリスは二人を正面に座らせ、話を聞いた。

「――さっき何を隠した？」

いきなりきたか、とカイル。しらばっくれることも考えたが、エリシアの顔を見て、話すことを決意した。

「……エリシアは天魔を使えるんだ」

そんな切り口から、カイルは今まで隠してたことを全て告白した。それを聞いた上で、エリスは改めて話をまとめた。

「つまり、エリシアちゃんは天魔を使えて、その天魔を使えるようになった原因かもしれないエンゼルダストの跡地で、治療効果のある光の塊を探してた」

「そう」

「そしたら、変な奴が急に襲ってきたと」

机上で一際存在を放つ、それ。

「――その光の塊を狙って」

にわかに信じがたい話だが、カイルの傷を見る限り、嘘ではないのだろう。

気付けば、外はすっかり暗くなっていた。

「今日はもう遅いから、家に帰りなさい」

と言って、エリスは光の塊を引き取った。

「あっ、俺達の……！」

「これは私が預かっておく。――それよりエリシアちゃんを送ってあげなさい」

「ごめんな。光の塊、エリスに取られちゃって」

夜道を歩く二人。見上げた先には宝石を散りばめたような星空が広がっている。

「私こそごめんね。カイルにいっぱい怪我させちゃって……」

「こんなのへっちゃらだよ。それよりも光の塊だな。エリスが寝ている間に探すか、最悪、また見つけてやるさ」

「そんなことしたら、カイルがまた怪我しちゃう……!」

「大丈夫。今度は刀を持ってくからな。――そしたらエリシアを守ってやるよ。俺の刀でな!」

ふんふんと刀を斬る真似をしながら、カイルは告げた。

「ほら、手貸してやっから、早く行くぞ」

「うん……!」

だけど今は、刀より手を握ってあげたのだった。

第三章「紅蓮の進攻」

何やらキッチンが騒がしい。

「なー、返してくれよ」

カイルがエリスに希望を訴えていた。返してほしい品は、光の塊と見ていいだろう。

エリスの返事はもちろん、

「駄目だ」

その一点張りだ。

ならばとカイルは色々な条件を出してみる。

「稽古ちゃんとやるから」

「駄目だ」

「仕事もちゃんとやるからさ！」

「駄目って言うてるでしょ」

カイルにしてはかなり譲歩したつもりだが、それでも駄目なよう
だ。

そうなってくると、カイルの中にもある感情が芽生える。

その感情を表すには、この一言で十分だった。

「ケチ」

だが、そんな安い挑発に乗るほどエリスも馬鹿ではない。

何とでも言え、といった態度を無言で貫く。もはや言葉すら返さ
ない。

「クソバハア」

プチ、という血管が切れたような音。

「クソバハア？」

一文字一文字を強調するように、かつ執念深く、言う。

包丁を手にしていたその手を置き、振り返る。

諦めて立ち去ろうとしていたカイルの襟を掴み、猫と戯れるみた
く持ち上げた。

強引にこちらを向けさえ、見せる。
鬼の形相を。

「口の利き方がなってないようね」
背後には包丁。恐怖は倍増する。

その後のカイルについては、まあ、言うまでもないだろう。

008

その日の夜。ここ東大陸イーストの離れに、一隻の潜水艦が到着していた。

大きさはそれほど大きくはないが、潜水艦の中からは沢山の兵が乗っていた。

体に叩き込まれた動き。寸分のズレも感じさせない行進。

その足音はどこか変わっていて、人の足音という感じはしなかった。

だが、その者達を指揮する先頭に立つ男は、人の足音をしていた。
人間と、さながら機械人形と言うべき兵で組まれた軍勢。
その進攻に、カイルが気付く由はなかった。

009

カイルの一日は、エリシアの家に行くことから始まる。
起きてすぐにエリシアを起こしに行くのだ。

というのも、エリシアは一人暮らしをしているから、確認を心にかけているのだ。

何の確認かと言うと、その主は体調の確認だ。というより、それがほとんどだ。

一応、隣のおばさんに面倒を見てはもらっているようだが、その家の娘さんも同じ学校に通っているため、まあ、あまり良い扱いを受けていないのだ。

だから、ほとんど自分一人で切り盛りしているのである。大したものだ。

うちに住めばいいじゃん、とカイルが誘ったこともあるのだが、亡き母と父と共に暮らしていたこの家を離れたくはないらしい。カイルも無理にとは言わない。

そんなわけで、カイルは毎日、エリシアの体調確認に通っているのだった。

エリシアの家は海沿いに面した場所にある。潮風が気持ちいいので、病弱体質のエリシアにはちょうどいいかもしれない。

走って十五分ほどの距離。汚れ一つない透き通った青い海をバツクに、その木造一軒家はある。

黄金色に輝く砂浜も相俟って、世界の絶景の一つにも挙げられている。ここ映した写真に自分の家も写っているとエリシアが喜んでいたり。

しかし、その景観を邪魔する青黒い雲海のような潜水艦が止まっていた。

珍しいな、とカイルは思う。こんな離れにくる船は、せいぜい漁船か貨物船くらいだ。

後でエリシアを連れて見に行こう。そう思った矢先のことだ。

エリシアが、いた。

いや、自分の家だから当たり前……ではなく、——目の前の砂浜にだ。

一人じゃない。大勢。数は十。黒尽くめの格好をした奴ら。

(この前の……!!)

カイルはすぐに思い出す。忘れるわけがない。あの機械人形だ。今回はそいつらを束ねる人物までいる。格好も他の機械人形と違って豪華だし、何より人間だ。一番偉い奴ってのが一目見て分かる。

カイルは走った。その途中、ある物が目に入った。

家の裏側。この前のことを受けて作っておいた、もしもの為の秘密基地。角材の積まれたそれでうまくフェイクされた穴である。その角材がどかされているのだ。明らかに使った形跡がある。そして見つかったのだろう。――だから連れて行かれている。

「……………ッ!!」

敵に追いかけまわされながら、一晩中、恐怖を押し殺して隠れていたと考えると、無性に腹が立った。後悔に似た苛立ちでもある。

「待ちやがれ!!」

そんな気持ちを吐き出すように、カイルは思いっきり敵に向かって叫んでやった。

010

砂浜に降りた時、そこにはもうエリシアの姿はなかった。

機械人形と共に潜水艦に乗せられてしまったのだ。

後は、砂浜に残るただ一人――

「お前か。魔造兵器^{アンリアル}を一体やったってガキは」

金髪のいかした男。齡は二十後半くらい。中は鎧。ファー付きの黒いマントを上。よく似合う。

「アンリアル？ あの機械人形のことか」

「第二世代兵器。聞いたことねえか。まあ、こんな離れじゃ話も流れてこねえか」

「そんなのどうだっていい。エリシアを返せ!」

「いいぜ。その代わり――」

男は脇差してた刀を抜く。速攻。カイルの懷に潜り込む。

（早い――ッ!?!）

「この紅蓮の王、グレイシア様の一太刀を受けて生きてたらな……」

!!」

カイルはすかさずバックステップを踏んだ。グレイシアの一太刀は当たらない。そう確信できる距離だった。

しかし、その刀身に――

「刀に炎が……!?!」

炎が燃え上がっていた。

炎を纏った一太刀は、カイルの腹を焼き斬った。

「ぐあああぁっ!!」

悶え苦しむカイル。腹を押さえながら砂浜でのた打ち回る。

「どうだ? 俺の天魔の味は?」

苦しい。死ぬ。そう訴える体は水を求めている。たまらず海に向かって駆け出すカイル。

その足に足を差し込むグレイシア。転倒するカイル。砂浜の細かい粒子のような砂が、腹の傷口に入って痛みを倍増させる。

「ぐあああぁ!!」

「ぎゃーぎゃー喚くなよ」

グレイシアはカイルの頭を踏みつけた。炎を纏う刀を天に掲げる。「あのな、魔造兵器はオモチャじゃないんだよ。お前如きじゃ弁償できない代物なの。分かってるか?」

言葉を返そうにも、カイルの口は砂浜に埋められている。こんな返せるわけがない。

「――分かってんのかって訊いてんだよ!!」

グレイシアは刀を振り抜いた。

その時である。

炎を打ち消す炎が、脇から飛んできた。

「――紅蓮昇華^{フラウン}!!」

この言葉と共に。

炎によって弾かれた刀が、天を舞い、逆光を散らしながら、砂浜に突き刺さった。

その行方を目線で追っていたグレイシア。それを正面に向ける。ちょうどよく、この砂浜に足を踏み入れたところだった。

「お前は、セントラルの……！！」

真っ赤な長髪。たくましいガタイ。白いマント。貫禄のある渋い顔。手には一本の刀。

紅蓮の隻腕。人は彼をそう呼ぶ。

「――グレンハルト！！」

かつてのロイの仲間。今は中央大陸セントラルの護衛剣士を勤めている。

「子供相手に天魔を使うとは、一端の軍人が聞いて呆れる」

「何故、セントラルにいるはずのお前がここにいる！？」

「ちよいとした野暮用だ。――仲間の助けとなれば、断る義理もないだろう」

ところでお前、とグレンハルト。

「――いつでも子供の頭を踏んでいるつもりだ？」

グレンハルトの握る刀に、猛々しく炎が渦巻く。

「火力の違いを見せてやろう」

炎は爆発的に燃え上がり、その迫力を増した。

グレイシアも馬鹿ではない。紅蓮の隻腕といえば、炎の天魔を扱う者の中でも、頂点に立つ強さだ。相手にならないのは手合わせせずとも分かる。

「くっ……」

グレイシアはカイルの頭から足を外した。咳き込むカイル。相当苦しかったに違いない。

「中にいる子を置いて――退け！」

第四章「白い天魔の正体」

エリシアを救出したグレンハルトは、負傷したカイルを背負い、用事も兼ねてカイルの自宅まで運んでいった。

エリシアは意識を失っている。暴行された形跡は見られないので、精神的なショックによるものだろう。

エリシアは腕に抱え、カイルを背負う。鍛えているとはいえ、グレンハルトも大変だ。

「……っ、っ」

痛いのか、悔しいのか。

カイルが泣いていた。

背中で泣くその声に、グレンハルトは静かに耳を傾けた。

それ以上のことはせず、家までの少しの間だけ、泣かせてやろうと思った。

012

卓上には四つのカップがあった。三人がコーヒーで一人が牛乳。

一人は言うまでもなくエリシアだ。

キッチンに立つエリスは、腕を組みながら神妙な面持ちでいた。

視線を卓上に向けて。

その卓上の中心には、一連の騒動の原因である光の塊が無骨に置かれてある。

実は、グレンハルトはエリスから光の塊の調査依頼を頼まれており、それでちょうどよくイーストに来ていたのだ。

もっとも、グレンハルトは全くの別件で赴いたのだが。

「……エリシア、で良かったかな」

エリシアは小さく頷く。

「差し支えがなければ、カイルに白い天魔を使って見せてくれないか？」

「俺は別にい……！」

「――分かりました」

エリシアは迷うことなく返事をし、カイルの隣に立った。

腹部の傷に向けて、少し離れたところで手のひらを当てる。

目を瞑り、精神を集中させた。

今さっきの出来事のせいで、なかなかうまくいかない。精神が乱れる。苦しそうだ。

少しでも和らげてあげようと、カイルはエリシアの腕に手を重ねた。

人の、温もり。心が和らぐ。

（……ありがとう、カイル）

手のひらより、白い光が放たれる。

すーっと瞳に入ってくる、透き通った神秘的な光。

聞いてはいたが、初めて目にするそれに、エリスは驚きを隠せない。

対照的に、グレンハルトは何か確信めいた表情を浮かべていた。

白い光が収まる。カイルの受けた傷は消えている。

「……ありがとう」

グレンハルトに礼を言われると、エリシアはまた席に戻った。

最初に言っておく。そんな前置きから始まった、グレンハルトの結論。

「エリシアのその力は天魔ではない」

カイルとエリシア。両者の間に衝撃が走る。

「天魔は本来、発動の際に紋章が浮かぶもの。だが、エリシアにはそれがない」

「アイツやおっさんのもなかったじゃねえか」

「簡略化してあるからだ。しかし、これは慣れが必要。――話を聞

く限りでは、エリシアのそれは最初から紋章のようなものはない」

「じゃあ、天魔じゃなかったら、一体何だって言うんだよ」

今にも噛み付いてきそうな目。カイルはグレンハルトを睨み付けた。

グレンハルトは少し考え、答えをまとめた。何分、まだ不確定な要素が多すぎるから。

「――力だ」

グレンハルトは告げた。しかし、カイルは信じれずにいた。聞き間違いかと思い、もう一度、聞いてみた。

「……なんだよ、それ」

グレンハルトは再度、今度ははっきりと聞き逃さないように告げた。

「――天使の力だ」

第五章「誇りにかけて」

カイルが初めてエリシアと会ったのは、本人は覚えてないだろうが、三歳の頃だ。

大きな接点はなく、小さい島の近所で出会っただけの話で、だからカイルが覚えてないのは当然と言えば当然である。

しかし、三歳……、いや、この際年など関係ない。

カイルの知るエリシアは、いつもいつでも人間なのだから。

「何だよ、天使って……」

カイルはその怒りがわからなかった。この、すごくムシヤクシヤした気持ちをぶつけたくてしょうがなかった。

「エリシアはそんなじゃない！ 人間だ！」

「カイル、私は別に……」

「そうだ、カイル。お前の言う通り、エリシアは人間だ」

「じゃあ……！」

グレンハルトは正確に言い直す。

「人間、だった」

「……！！」

「天使の力を持ってしまった以上、天使への成長は続く」

力はその兆候と言っている、とグレンハルトは言う。

思えば、エリシアが体が弱いこともそれが理由なのかもしれない、とカイルは思った。

だとすれば、この力のせいでエリシアは一人ぼっちにされたんじゃないか。

この力——そう。

「エンゼルダスト……」

全ての、元凶。

「……エリシアは、ずっとこのままなのか？」

「今現在では策は見つかっていない」

進路が絶たれた気分だった。

結局、この島であいつらと戦っても、倒しても、何をしてもし——
エリシアの体は元に戻らないのだから。

「……お前の父、ロイは、ただ伝説の男と呼ばれているわけではない」

グレンハルトは言う。

「どんなに困難な状況がきたとしても、諦めずに、前に進むことを選んだ」

仲間と共に——カイルに差し出される、手。

酷く、傷ついた手だ。名誉の負傷というやつである。

仲間と共に戦ってきた記録が、この手には刻まれている。

「世界を変える気持ちがあるなら……ついてこい」

グレンハルトはその場を離れた。

「明朝五時。セントラル行きの船を出す。——覚悟があるなら、来い」

013

その夜、エリシアはカイルの家に泊まることになった。いつまたあいつらが襲いかかってくるかわからないからだ。

エリシアは疲れたのか、晩飯のシチューもろくに食べずに、すぐに寝てしまった。

カイルもカイルで、シチューに手を付けていない。

嫌いだからではない。単純に食べる気にならないのだ。

まあ、あんなことを聞いたのだから、当然と言えば当然である。

毎日三食残さずに食べてきたカイルが残すなんて。エリスは不安からその場に残っていた。

カチ、カチ……という時計の音がよく通る。

長く無言の状態が続く中、ようやく口を開いたのは、カイルの方だった。

「……親父は、エンゼルダストのことで家を出たのか？」

カイルには内緒にしておいてほしい。それが父、ロイからの伝言だった。

決心を固めるように目を瞑り――それを開いた。

「……そうよ。ロイはエンゼルダストの調査に向かった」

エリスはロイが調査に向かった理由を話した。

かつて、ロイはドラグマ族という絶滅した種族の生き残りである“ラピス”という女と旅をしていた。

ロイは、今回の一件が彼女と関係があるのではないかと思い、旅に出たのだ。

ロイという人間は正義感が強く、例えばそれが馬鹿馬鹿しいと思われようが、仲間の為なら何とでも戦えるのだ。

もちろん、今回の一件がドラグマ族と何か関わりがあると決まったわけではないが、あれから随分と長く帰ってきてないのだから、何か関係があったか、はたまた接触に手こずっているのか、あるいは想像したくはないが行き倒れたか、その類の可能性は否定できない。

とにもかくにも、エリスが知っているのは『ロイがラピスと接触している』ということのみ。それ以外は知らない。

話を聞いた息子カイルは、やっぱりロイが嫌いになった。

「身勝手過ぎるだろ。家ほったらかして」

「私は嬉しかったけどね」

と、エリスは言う。

「はあ！？　なんで!？」

「だって、それは頼られてるってことでしょ。頼れない相手にそんなことは言えないと思うけど」

グレンハルトは言った。

こい。そう、言ってくれた。

グレンハルトは、カイルを頼りにしている。可能性を信じてくれている。

「あのオッサン……」

悔しがるカイルの前に、光の塊が置かれた。

「——カイル、あんたの誇りは何？」

もうそれ以上、言う必要はなかった。

カイルは光の塊を持ち、——工房へ向かった。

その夜、鎚の金属音が鳴り止むことはなかった。

エリシアの夢の中でも。

014

明朝五時。

やや霧がかった浜辺。

グレンハルトはいた。

セントラル行きの小型船を待たせ、カイルが来るのを待っていた。

「！」

霧の向こう側から、人影が見える。

一つ……、二つ。

「ふっ」

グレンハルトは笑った。

問う必要などなかった。

「——遅いぞ、カイル」

カイルの後ろには、エリシアもいた。

少年にはもう、覚悟を決める存在がいたのだ。

「悪い。こいつを打つのに時間がかかった」

薄い霧の中で、燦然と存在を主張する——、一本の刀。

あれは、光の塊が放つ輝き。

いい刀だ、と、カイルの目もあわせて思った。

「……名を、聞こう」

恥じることなく。

誇らしげに。

少年は、強く強く、その刀の名を口にした。

「――名刀“ブリュンヒルデ”」

第六章「飛燕の黒騎士」

船は大海原を駆けていた。

天魔による自動操縦により、舵の操縦は勝手にやってくれている。船内はとても騒がしい。

カイルとエリシアがあちこちを走り回っているからだ。

互いに島から一步も外に出たことがないため、子供ながらに興奮しているのだろう。

楽しんでいるその顔に不安は感じない。

よかった、とグレンハルトは安心していた。

何事もなく時間は経過していき――

島を出て一時間が経った。

さすがに二人も疲れたようで、今はグレンハルトの傍で大人しくしている。

「……………」

ふと、カイルの目にグレンハルトの左腕が映った。

明らかに人のそれとは違う、いわゆる義手と呼ばれる機械の腕である。

「……その腕、どうしたんだ？」

カイルが尋ねると、グレンハルトは左腕を表にした。

「ああ、これか。昔、仲間に落とされたんだ」

「仲間に？」

「仲間と言っても、そいつは最終的に裏切って敵になったんだがな」
今でこそ存在しないが、かつてEXAイクサという評議会があった。

そこに所属していたグレンハルトは大が付くほどの失態を犯してしまい、後に敵となるヴィンセントと呼ばれる男に左腕を切り落とされたのだ。

「しかし、ロイは息子に何も話さないのだな」

「ああ、親父はエリスに尻叩かれてばっかだからな」

「カイルのお父さん、お尻叩かれてるの？」
「そういう例えがあるんだよ。習っただろ、学校で」
その後、カイルとエリスの間で勉強会が行われた。
未だ独り身のグレンハルトは、こんな子供が欲しいものだ、と二人を見て思っていたのだった。
三人を乗せた船は、セントラルへと突き進む。

001

セントラルに到着した。

「これがセントラルか……！！」

初めて見る景色にカイルもエリシアも目を輝かせている。

「お店がいっぱい並んでるよ、カイル」

「ああ！ 行ってみよう！」

興奮そのままに、二人は早速とばかりに街中へ走っていきこうとした。

「待て待て」

が、そんな二人をグレンハルトが止めた。

振り返るカイル。残念そうな顔を浮かべている。

「観光は後だ。まずはうちの本部に行ってもらおう。一般人ではなかなか出入り出来ない場所なんだぞ」

それを聞いたカイルは少し機嫌が良くなったようだ。

「じゃあ、まずはそこに行くか」

一人で取り仕切って街の中を歩いて行ってしまった。後からエリシアも付いていく。

「場所を知らないだろ」

やれやれと疲れ顔でグレンハルトは二人を追った。

船場から中心部にかけては、出店や民家が並ぶ。

中心部には噴水があり、そこから四方に向けられた道により、目的の場所に移動できる。ちなみに船場は南だ。

セントラル護衛剣士が衣食住を共にする本部とやらは、中心部の正面に位置する。

二階建てのホワイトハウスだ。頂上には旗が掲げられている。

カイルとエリシアはグレンハルトの案内の下、奥へと突き進む。

途中、警備が二人いたのだが、グレンハルトに向けて敬礼していた。

レッドカーペットを歩く三人。途中、護衛剣士と何度かすれ違う。ふと、ニヤニヤしながらカイルが尋ねた

「おっさん、実はかなり偉い人？」

「まあ、それなりにな」

いくつもの部屋を横目に、三人は真っ直ぐ突き進んだ先にある会議室に足を踏み入れた。

円卓には総勢八名の護衛剣士がいた。年はだいたいグレンハルトくらいかそれより下くらい。皆が貫禄を感じる。

その会議に参加者が敬礼をしてくるのだから、やはりグレンハルトは相当偉いに違いない。

「……………」

グレンハルトが参加者に異常がなかったかを尋ねている間のことだ。

「ねえ、カイル」

「なんだ？」

「あそこにいる人、まだ私達と同じくらいだね」

エリシアが指差す先には、少年のような少女のような護衛剣士がいた。

長めの黒髪。黒衣に包まれたフォルム。中性的な顔付きをしている。

カイルやエリシアとそう年もかけ離れていない。なのに、こんな会議に出ているのだから凄腕に違いない。

「――クロウのことが気になるか？」

事を済ませたグレンハルトがこちらに戻ってきた。

「クロウ？ 変な名前だな」

「本人も気にしているからあまり言うな。――それに年も近いんだ。仲良くやるといい」

と、耳打ちしたところで。

「今日集まってもらったのは他でもない。かねてより話に挙げていたイースト地方のエンゼルダストに関してだ」

ざわつく参加者達。

グレンハルトは二人に軽い自己紹介を頼んだ。

「カイルだ」

「エリシアです」

「カイルは知っての通り、ロイ＝ブリュンヒルデの息子だ」

様々な言葉が飛び交う。好意的な見方をする者もいれば、否定的な見方をする者もいる。

いずれにせよカイルは比べられるのが嫌いなので、不愉快でしうがなかった。早くこの場を立ち去りたい気分だ。

「エリシアについてだが、彼女は天使の力を持っている」

おお、と素直に驚く声が。

しかし、あんな少女が？ とも言われている。

エリシアは少し怯えている様子だ。

「この二人については、これより護衛対象とする。異議のある者は挙手を」

参加者が静まる中、たった一人、奥の方で立つその者だけが手を挙げていた。

「よし、クロウ」

クロウは中性的な声で発言した。

「僕は納得がいきません。彼女の護衛は領けませんが、彼の護衛には領けません」

「常々言っているだろう、クロウ。護衛で最優先すべきは自分では

なく相手だ。自分の言い分を通す前に、相手を護衛することを考える」

「――別にいいけどな」

「！ カイル！」

カイルは退屈そうな態度で言い返した。

「あんな女みたいなの面したやつに護衛される義理もないしな。むしろ、護衛される側だろ、あっちの方が」

「カ、カイル！ 駄目だって！ そんなこと言ったら！」

「口は達者なようだな。――グレンハルトさん」

「……聞きたくはないが、一応聞こう。クロウ」

クロウはカイルを指差し、

「その男と戦わせてください。それで納得がいけば、護衛にも参加します」

などと言う。

あまりに馬鹿げた発言にグレンハルトは頭を抱えている。

「いい加減にしろ、クロウ。護衛はお遊びじゃな――」

「――やってやろうじゃん！」

ここにも馬鹿が一人。馬鹿が二人に増えた。

「ちようど長旅で退屈してた頃だ。体を動かすにはちようどいい」

「ケンカは駄目だよ、カイル！」

「いいんだよ。エリシアを護衛できるかどうか腕試ししてやる」

第七章「黒い両翼」

本部の地下に併設されてある訓練所。

教室半分くらいの敷地には、土で固められた地面がある。

周りの壁はスポンジのような軽い素材で固めてられている。

見た感じの印象は、防空壕とそう変わらない。

照明があるだけマシと言ったところ。

もちろん、収容できる人数も限られている。

訓練所にはカイルとクロウの他に、グレンハルトとエリシアも同席していた。他は収容人数関係なくあまり興味がないらしい。クロウが圧勝すると分かっているからだ。

実際のところ、グレンハルトも乗り気ではない。やめさせたいところだが、いい機会だとも思っている。

「当然だが、刀の使用は認めない」

グレンハルトの手には、三本の木刀が握られていた。

内一本をカイルに渡し、残る二本をクロウに渡した。

カイルは珍妙な生物を見るような目でクロウを見た。

「ふーん、二刀流ね」

これでもカイルは刀鍛冶だ。持ち主と刀の相性くらい見て分かる。本当は二刀流なんて使つてと馬鹿にしてやるつもりだったが――

（使いなれてるな）

いい腕をしている。構えを見て分かる。

通常、二刀流というのは素人が簡単に成せる技ではない。

クロウの構えは完全に素人のそれを越えている。普段から二刀流を使いこなしているのが見て窺える。

「こちらが戦意不能と判断した時点で終了とする。いいな」

ふと、クロウが尋ねた。

「グレンハルトさん、天魔は使っていないんですか？」

グレンハルトは即答した。

「全力で行け」

「グレンハルトさん！ カイルは天魔を使えないんだよ！？」

「余計な口出しするな、エリシア。——全力を出してもらった方が分かりやすい」

グレンハルトは黙り込む。

そう。エリシアの言う通り、公平性を主張するなら、クロウに天魔を使わせるのはおかしい。

だが、グレンハルトは敢えてクロウに全力で行かせることで、カイルに己の実力を分からせようとしていたのだ。

「……この木刀が床についたら、試合開始だ」

そう言って、グレンハルトは手前に木刀を立てた。

「いくぞ」

木刀から手を離す。

音への集中。同時に相手への集中。

カイルは息を呑んだ。

カタン——……

「！！」

先手必勝。カイルは真っ先にクロウの懐に入った。

入ったはずだった。

（消えた……！？）

クロウがいない。どこだ。どこにいる。探す。あらゆる方向を。

ここまで一秒足らず。

瞬間、見た。

地を這う、黒い影。

両翼を羽ばたかせた、黒い燕。

飛ぶ——！！

「……っわ！！」

クロウの打ち上げるような一撃は、カイルの翼とも言うべき木刀

を弾き飛ばした。

まただ。

今度は掬い上げるような一撃が、カイルの顎を打った。
華麗に舞う。

カイルの身は天に投げ出され、地に落とされた。

（三秒か……。最初にしては持った方か）

「そこまで！」

エリシアはカイルの元に駆け寄った。

「カイル！」

カイルは顎を押さえながら、ゆっくりと起き上がった。

「くそっ、全然見えなかった……」

「これで分かっただろう、カイル」

「！」

「島で一番かもしれないお前の腕では、世界の足元にも及ばないんだ。――まずは覚悟に伴う力を身に付けろ」

第八章「俺は弱い」

負けた。

完敗だった。

着いた当初は観光を予定していたカイルだったが、今はグレンハルトに与えられた部屋で、エリシアと共に休んでいる。

六畳ほどのその部屋は、他の護衛剣士達が使う部屋と同じものだ。固いベッドに加えて、冷暖房設備までない。

環境は最悪だが、心身を鍛えることに余念のない護衛剣士にとってすれば、これぐらいがちょうどいい。

……とは言っても、やはりそこは子供。

「このベッド、固いね」

二段ベッドの下を使うエリシア。思ってた手触りではないので不満気だ。

「オッサンに言えば、エリシアはいいとこに変えてくれるぞ？」

「カイルと一緒になら平気だよ。——それに、私、グレンハルトさんのこと嫌い！」

「何か言われたのか？」

「カイルのことイジメた。グレンハルトさんがクロウさんに天魔を使っただけって言わなければ、カイルが勝ってたもん」

「……いや」

カイルは否定した。

「今の俺じゃ、クロウには勝てなかった」

カイルは体を起き上がらせた。足を組み、前を向く。
そこに何かを映すように。

「カイルは負けないよ！」

「ありがとな。けど、オッサンの言ってた通り、俺は島では一番かもしれないけど、世界が相手じゃ足元にも及ばないんだ」

カイルは自分なりに敗因を考えていた。

「仮に俺が天魔を使えてたとしても、クロウには勝てなかった」
「どうして？」

「目を瞑ってたんだ。俺、刀を使って喧嘩とかしたことないから、
力んで目を瞑っちまう」

「しょうがないよ。初めてなんだから」

「それが通じるのは、せいぜい喧嘩までだ。実戦になれば、弱点を
晒してるのと同じ」

だからこそ、カイルは今日の試合で感じたのだ。

「クロウと真剣でやりやったら、俺、死んでた」

——“自分の弱さ”を。

「つく……つく」

下から小鳥が絞り出したような泣き声が聞こえた。

「何でエリシアが泣くんだよ」

「だって、カイルが死んだら……つく、つく」

はぁ、と溜め息をつくカイル。

「——死なねえよ」

その言葉に嘘はない。

「つく、本当？」

「当たり前だろ。死んだらエリシアこと誰が守るんだよ」

カイルはベッドから飛び降りた。

目を真っ赤に染めるエリシア。まったく、と思う。

「死ぬのは恐いし、痛い。エリシアだって恐いのも痛いのも嫌だろ
？」

「うん……」

「だろ？ だから俺は死なない。そういう思いをしたくないから、
誰にも負けないくらいに強くなる……ならきゃ駄目なんだ！」

部屋の外。食事を届けにきたクロウが皿を持って、立っていた。

中に運ぶつもりだったが、急に運んでやる気がなくなった。

皿を置いて、その場を立ち去ることにした。

「三ヶ月だ。みっちり鍛えてもらう」

第九章「修行（基礎編）」

カン、カン、カン――

物静かな地下の訓練所には、乾いた木の音がよく響く。

セントラル到着から一日が経ち、本日よりカイルの修行が始まった。

カイルの相手を担当するのは、グレンハルトである。

グレンハルトは親睦を深める為にもクロウを担当させたかったのだが、カイルが言うに、

「修行が終わったら、あいつに試合を挑む。だからそれまでは力を明かさないようにする」

とのことらしい。

まあ、元々、三ヶ月という短期間で修行というのが無理があるので、グレンハルトも自らが相手になった方がいいと思ってはいた。

だから、提案に了承した。

そうして今、実際にカイルの相手をしている。

木刀での打ち合い。右、左と交互に繰り出す木刀を打つ。ただそれだけの簡単な内容だ。

と、素人は思うだろう。

グレンハルトは本を片手に相手をしている。その隙間からしっかりとカイルの動きをチェックしている。

「また振りが戻ってきたぞ。脇を締めろ」

隙あらば木刀で弱点をつく。

「お、おう！」

一点を直せば、また今度は別の個所が――

「間合い。前に行き過ぎだ」

足元を叩くグレンハルト。カイルは幅を修正し、打ち合いを再開した。

壁際にエリシアがいる。修行の様子を見ているのだ。

グレンハルトのことはあまり好きではないが、カイルのことが心配なので見守っているのだ。

しかし、見ているだけの退屈な時間。

長時間が経つと、うとうとしてくる。

睡魔と格闘しながら、カイルを見守る。

そんな日々が――

一ヶ月経過した。

002

見違えるように……とは言えないが、この一ヶ月の間でカイルはだいぶ上達した。

元より素質はあるとは思っていたが、ここまでとは。

その日も地下訓練所で打ち合いになると、カイルは思っていた。

しかし、その日は違った。

「今日は打ち合いはやらない。もう必要ないだろう」

走り込みなどの基礎は、その日を以て終了となった。

「じゃあ……！」

「まだ修行は終わらない。今日からカイルにはセントラルの護衛に参加してもらう」

「えっ、いいのか？」

「それだけの力は付いたと俺は思っている」

ただし、と念を押すグレンハルト。

「――クロウをパートナーにつけてやってもらおう」

第十章「修行く応用編」

カイルが文句を口にしていた。

私室で正装に着替えながら、クロウと組まされたことへの不満をこぼしている。

エリシアは壁側を向いていた。

着替えの途中、後は要所に鉄の当て物を装備する工程を残した状態。カイルはそんなエリシアに話しかけた。

「終わったぞ」

振り向き際に、肩、脚、肘の三ヶ所。両腕合わせて六つの鉄当てを装備した。

エリシアが完全に振り向く。同時に瞳が大きく開いた。

「どうだ？ 結構様になってるだろう？」

青をベースとした半袖の服。下は白よりやや暗めの色。節々に白のラインが入った、スタイリッシュな服装だ。

利き腕とは逆の脇には、黒い鞘に納められた刀が差されている。

見えない部分ではあるが、胸元には薄い鉄板が入れられている。

動きに支障の出ない程度の重さながら、急所を守る役割を果たす優れものだ。

新鮮なカイルの姿に、エリシアは言葉も忘れて見とれてしまっている。

「……おい、聞いてんのか？」

カイルはエリシアに近寄り、彼女の額に掛かる髪を上げ、己の額を当てた。

「うーん、熱はないか」

エリシアからすれば、言葉を失うほどカッコ良い王子様が目の前にいるわけで。

「だだ、大丈夫だよ！」

バン、とカイルを突き飛ばすエリシア。

「？ まあ、そんだけ元気があれば大丈夫か」

カイルはエリシアから少し身を引いた。

「もうすぐ集合時間だから行くけど、ちゃんとオッサンの傍に
いるんだぞ？」

「うん、わかった」

「途中まで一緒に行くか？」

「

うん！」

003

セントラル護衛剣士軍。

その本部の前。

黒衣に身を包む男がいた。

クロウだ。

黒衣の裾からは、制服の白が垣間見える。

「遅い」

厳然たる雰囲気を持ちながら、クロウは言う。

正面、不服そうなカイルがいる。

「一分だけだろ。オッサンとこにエリシアを送ってたんだよ」

「オッサンじゃない。グレンハルトさんだろ。お前も一端の軍人な
ら上司を敬う気持ちを大事にしろ」

「わかったよ。“クロウさん”」

嫌々言うカイルであった。

「気持ち悪いから呼び捨てでいい」

どちらも子供である。

その後、二人は町の奥に入っていた。

「それで、今日は誰を護衛するんだ？」

「依頼はない。今日は町の見回りだ」

「なんだよ。じゃあ、今日は刀使わないのか」

「町の見回りも立派な仕事の内だ。しっかり気を引き締めろ」
「わかったよ」

自分の腕が試せなくて、少し残念なカイルだった。

第十一章「守るということ」

セントラルの町中を、カイルとクロウが見回りしている。

貿易の盛んな町としても有名なここセントラルには、町の至る所に店が並んでいる。

カイルとクロウはそれら三十はあるであろう店を一件一件回っていた。

護衛剣士の仕事は何も人の護衛だけではない。

元々、グレンハルトが町の役に立ちたいと思い立ち上げたのが設立のきっかけなので、お年寄りの体調を聞いて回ったり、買い物を代行したりと。セントラルを快適に過ごしてもらうのも仕事の内だ。

二人は今、喫茶店からの依頼で、コーヒー豆を十袋運んでいる。米袋ほど大きくも重くもないが、なかなかいい運動になる。

「毎日こんな雑用みたいなことしてるのか？」

「そうだ」

「嫌になんないのかよ」

「最初は嫌だったよ。今のお前と同じでな」

「別に俺は……」

「誰だってそうだ。剣士なら己の強さを試したくなる。こんな雑用みたいなことはしたくない」

「けど、とクロウは言う。」

「僕達は“護衛剣士”だ。戦うことよりも、守ることを第一に考えなければならぬ」

「守る。」

「簡単なように思えて、とても難しいこと。」

「守るかあ……」

その意味を、カイルはまだ知らない。

一通り見回りを終えた二人。

「クロウちゃん、これ、よかったらカイルちゃんと一緒に食べてね」
青果店で働く白髪のおばちゃんから、果物の詰まった紙袋を渡された。

真っ赤な皮に包まれた林檎である。逆光を浴びる部分が輝いている。

「いいんですか、こんなに沢山」

ざっと見、十個くらいはある。二人で食べるには量があり過ぎる。
「いつもお使いしてもらってるお礼だから。余ったら他の方達にも分けておくれ」

「では、ありがたく頂きます」

二人は一礼をし、青果店を後にした。

さて、後は本部に戻るだけだ。

「よかったな」

「何が？」

「名前だよ。あのおばちゃん、お前の名前を覚えてくれただろ」
思えば、確かにそうだ。

「こうやって町の人達に名前を覚えてもらうと、嬉しいだろ」

「そりゃあ、うん」

「だったら、もっと頑張れ。今日のお前は百点満点中二十点だ」
「人を持ち上げというそれかよ」

バン……ツッ!!

その音はカイルの右手から。先程コーヒー豆を運んだ喫茶店からだ。木の扉が割られている。

突き飛ばされるように割って出てきたのは、店主のおじさんだっ

た。真正面の民家、およそ十メートル先まで飛ばされる。石畳に叩きつけられる。

「大丈夫ですか！」

クロウとカイルが店主に急いで駆け寄った。店主は腰をさすりながら、クロウの肩を借りながら腰を上げた。

「いてて……ああ、大丈夫だ」

「客とのトラブル……ではここまですませんよね。一体、何が」

「俺にもよくわからねえ。急にずぶ濡れの大男が来て……」

カイルは見た。

右手、喫茶店。

壊れた扉の向こう、二メートルはあろう大男の姿を。

口回りにヒゲを蓄えた、毛むくじゅらの大男である。

山賊のような恰好をしたその大男の右手には、大きな大きな斧が握られていた。

確かに、店主の言う通り、大男は全身ずぶ濡れだった。

「クロウ、こいつ武器持ってるぞ」

カイルは刀を抜こうした。

だが、

「待て」

クロウは抜刀を止めた。

「事情を聴く前から、そんなものを抜くな」

「事情？」

大男は斧を振り上げた。カイルはバックステップを踏む。そこに振り上げたそれが叩き落とされる……！！

「聴ける状態じゃねえだろ！」

クロウは店主を離れた場所に避難するよう指示した。

同時に周辺に集まった住民にも指示をする。

賑やかだったセントラルが別の賑わいで盛り上がる。

改めて、クロウは大男を見た。

「！」

見て、すぐに気付いた。

大男の両目。完全に白目になっていた。

（操られてるのか……？）

周囲の気配を探るが、それらしきものは感じない。

「どうすんだよ！ このままじゃやられるぞ！」

カイルは大男と正面で対峙していた。いつでも抜刀できる状態で。

「下がっている」

黒い燕が、走った――

大男の後ろを取る。しかし、大男は気配に気付いた。

斧を振り回す。後ろに向けて。正面のカイルはしゃがむ。すると

民家の岩壁に傷が走った。鋭い傷だ。まるで真空の刃のよう。

クロウは飛躍。大男の上に行く。

着地。大男、反撃する。

「遅い」

着地に合わせて足払い。巨城を崩す。

体術によって、大男を拘束する。

「す、すげえ……」

大男は訳も分からぬ声を上げて抵抗している。

「もたもたするな。早く男から斧を引き剥がせ」

カイルは慌てて斧を拾おうとした。

その時だった。

「？」

バチツ、と電流が斧から聞こえた。

そして、はっきりと正体が浮かぶ。

刃の面に浮かぶ、天魔の紋章。

「！ こいつから離れろ！ クロウ！」

瞬間、クロウの体に稲妻が迸った。

「ぐっ……！！」

反射的に地面を転がって逃れたが、足を少しやられた。

「っ……」

腿が震えている。自慢の脚力が封じられた。

「大丈夫か!？」

「ああ。……天魔を使うとは、油断した」

斧の柄の部分。特殊な木によって電気を通さなくなっている。

本来なら感電死してもおかしくないが、なるほど、そういう仕組みか。

「……刀を抜け、カイル」

「! 事情を聴かなくていいのか？」

クロウは、どこことなく“似た感覚”を思い出していた。

この感じは、そう――

(アラベルの魔造技術……)

「……EXの仕業か」
エクステリア

「おい、クロウ!」

「容赦はいらない。この男はもう……人間ではない」

第十二章 「飛燕天翔」

クロウの気配が変わった。

それは、カイルにも見て分かるくらい、……いや、感じて分かるくらいだった。

今にも殺されそうで、そんな状態が続くものだから、自然と体にも力が入ってしまう。

無駄な力である。戦う上で足枷にしかない。やってきたことをやる。ただそれだけのことができない。

これが、戦場か。

臆するカイルを脇目に、クロウは武力行使に移った。

左右の腰から引き抜くは、短刀。

刃を短くすることで、二刀流のあらゆる利点を最大限活かす。

クロウは低い姿勢から入った。その速度は通常に比べれば格段に遅い。

だが、相手は大男。十分過ぎる速さだ。

速攻。右の短刀で臄を切る。

「！」

刃が通らないだと……！！？

「っ……！！」

クロウはバックステップで身を引く。そこに大男の斧が繰り出された。

石畳が割れる。地盤ごと掘り起こす。

バックステップからクロウ。民家の壁を蹴り、短刀を逆手に持ち替え、首を狙う。

「！」

カイルは注意を引こうと、刀を構えて前に出る。

大男の斧が振り上げれる。

「っ！」

モーションがでかい。仕留め損ねた。クロウは攻撃を中止する。大男が振り上げた斧からは、稲妻が迸っていた。

来る……！！

「斧を振らせる前に止めろ」

「無茶言うなよ！」

カイルは横にステップを踏んだ。そこを稲妻が生き物のように突き抜けた。

ドン！ という地をも揺るがす衝撃と共に、中央部の噴水に穴を空けた。

空いた穴から噴水の水が流れてきている。

浸水した水はこちらの方まで届いていた。

（っ、水の上では動きに支障が……）

その時履いていた靴の素材は革。防水性はなく、もろに水を吸ってしまっている。

重さにしてみれば、ほんの数グラム。だが、クロウにとってすれば数キロにも等しい。

「——うわ、つめて！」

そう言うや否や、カイルはその場で靴を脱いってしまった。

「……悪くない」

確かに履いてるよりか脱いだ方が楽だ。クロウは靴を脱いだ。靴下も脱いで、完全に素足の状態となった。

軽く飛び跳ねてみる。いい。これなら——、クロウは大男を見た。刀は通らない。ならば、当ててみるか。

「……離れている、カイル」

ぶわっ、とクロウの髪が僅かに揺れた。周囲には波紋。体が浮いている。

「何する気だよ」

と、カイルが尋ねると、クロウはこう答えた。

「見ている。――飛燕の本領を見せつけてやる」

瞬間、クロウは消えた。

揺れる水。交錯する波紋。

姿、打撃。共に見えず。

そこには、音しかない。

ひえんてんしょう
飛燕天翔。

通常の倍以上の風 of 天魔を費やすことで使用可能な、ハイスピードの連続攻撃。

水を切り、打ち、敵を翻弄する。

ただそれだけに留まらず。

「終わりだ」

大男の前にはクロウ。

大男は斧を振り上げたが、そこから先へ下ろせなかった。

震える腕。否。全身。

全身の筋肉が痙攣している。

クロウは何も打撃を繰り返し当てているわけではない。

的確に、脳の伝達信号を狂わせる一撃を、繰り返し当てていた。

「今度はお前の番だ、カイル。――あれから一ヶ月。どれだけ成長したか見せてみる」

「言われなくても――」

カイルは両手で刀を握り、大男を見た。

大男の右腕。

「見せてやるよ！」

斬る……！！

肘から先、ぶっとい丸太のような腕が落ちた。

バシャン、と水飛沫。血が赤薄く浸透していく。

落ちた右腕、その手には斧が握られていた。

第十三章 「エクステリア」

カイル、クロウの両名は本部に支援要請をし、被害報告や損傷個所の修復など。後は仕事を任せた。

クロウを怪我を押したまま、真っ先にグレンハルトの元に向かった。

扉を開けた瞬間、ふわっと甘い香りが嗅覚に突き刺さった。

カイルは自然と抱き締めていた。――エリシアのことを。

「ど、どうしたんだよ？」

エリシアは泣いていた。顔が真っ赤になるくらい。その熱がこちらまで届いている。

「だって……！」

二人をよそに、クロウは真っ先にグレンハルトに歩み寄った。中央の立派な机、椅子。グレンハルトは来るのを分かっていたかのように立っていた。

「――エクステリアだな」

グレンハルトは断言するように訊いた。

「はい」

エリシアをなだめながらも、カイルは二人の話に耳を傾けていた。そういえば、とカイル。

（あの時もエクス何とか言ってたな）

あの大男と戦ってる最中も、クロウは同じことを言っていた。

「……なあ」

訊いてみよう。カイルは疑問をぶつけてみた。

「そのエクス何とかって、エリシアの力と何か関係があるのか？」

グレンハルトとクロウは顔を見合い、目でやりとりをした。

まだ話すべき頃合ではありません、というのがクロウの見解。

しかし、グレンハルトは否定するように首を振った。

「ここを離れる時に話そうと思っていたが……」

事態が変わった。

こちらの動きにエクステリアが気づいてしまった。

後二ヶ月。そんな長い時間はもういられない。

今すぐここから離れるしかない。

でないと――窓から覗く、グレンハルトの眼下には、何ものにも代え難い大切な人達、町が広がっていた。

（関係のない人達まで巻き込むわけにはいかない）

グレンハルトの決意は固い。

「時間がない。話そう。エクステリアは天使の力を、つまり、エリシアを狙っている組織だ」

カイルの脳裏に瞬間的に浮かんしたのは、言うまでもなく、イーストで戦ったあの男達だ。

「……俺と会った時から知ってたのか？」

ふと、クロウがグレンハルトの肩を叩いた。

何か決心のついた目で、グレンハルトを見る。

無意識にクロウは自分の右腕を強く握り締めていた。

分かった。とグレンハルト。

「二年前、ある人物と出会った時、俺はその存在を知った」
話には続きがあった。

「その人物は、ここにいます」

カイルは、思わず、その人物に疑いと驚きの目を向けてしまった。

「まさか……お前……」

告白した。

仲間だから。

「そうだ。僕は元々、エクステリアに所属していた」

第十四章 「その真っ白な雪景色に何を思い描く」

その少年には両手足がありませんでした。

南大陸サウスの紛争地区。

年中降雪に見舞われるその地区で、その日、一つの戦いが終わった。

聞いた話では、今、世界を賑わせている『エンゼルダスト』という自然現象を分析している組織が、反政府側の人間に兵器を売ったらしい。

少年には両親と妹が一人、いました。

だけど、死にました。殺されたのです。兵器によって。

少年の住む小さな村は全焼してました。

道の至る所に人が死んでいて、火の気が収まると、反政府側の人間が死人から金品を略奪していました。

奇跡的に生き残った少年は、死にたいと願う中、その腐った光景を呆然と眺めていました。

すると、少年の元にもそいつらは来たのです。

金品一つない少年に怒りを覚えたそいつらは、少年からある物を奪ったのです。

そう――

『自由』です。

死ぬような激痛に気絶して、それから目覚めた時、少年はまたも奇跡的に生きてました。

両手足を失った少年は、普通ならば血を流し過ぎて死んでいたことでしょう。

少年を救ったのは、一人の科学者でした。

その科学者の名は――

アラベルⅡヒューズ。

アラベルは言った。

『自由が欲しくねえか』と。

気付けば、少年には両手足がありました。

但し、それは人のものではありません。

機械で作られた、人工的な手足です。

ダルマだった少年には、鋼の自由が与えられたのです。

少年はしばらく何も考えず、何もませんでした。

そんな日々を科学者アラベルの下で送っていて、ある日、彼が所属する組織『エクステリア』で組織の狗として働く機会を頂いたのです。

それは、少年にとって敵討ちのつもりでした。

家族を、村のみんなを――少年から全てをあいづらを、あいづらに兵器を売ったやつらを、殺す機会だったのです。

少年は訓練し続けました。

誰よりも強く。強く。

少年の成長はめまぐるしく、すぐにトップに躍り出ました。

力を手に入れた少年は、まず、全てを奪ったやつらを殺しました。人を殺めたのは、これが初めて。

すぐく、気持ち良かった。

だけど、悲しかった。

少年が本当に殺したいのは、兵器を売ったやつら。

そいつらが白状したのだ。誰から兵器を買ったのかを。するとこう答えたのだ。

『エクステリアだよ』

少年は組織の狗になって、沢山の人を殺めました。

両親には何度もこう言いました。

人を騙すこと。

物を盗むこと。

命を殺めること。

この三つだけは絶対に守ってと。

だけど、無理だった。無理だったんだ。

少年を駆り立てた復讐心があまりにも強かったから。

バカだよなあ、と、少年は思いました。

騙されてたんだ。

盗まれてたんだ。

命を殺めていたんだ。

——エクステリア（こいつら）が。

006

少年は逃げました。

雪の日。義手が痛むのは気温のせいか、それとも……。

少年は故郷へ帰りました。

そこには、もう何もなかったのです。

一面真っ白な雪しかなかったのです。

少年はその場で倒れました。

もういっそ——少年は持っていた刀を握り締めました。

その時です。

「ほう、噂通りの雪景色だな」

ザックザックと、赤い髪をした黒衣の男が現れたのです。

「その少年、少々、場所を尋ねたいのだが」

「……僕に関わるな」

「この近くで兵器を売買している組織があると聞いたのたが」
少年は立ち上がった。

「僕に関わるなど言ってるだろ！」

立ち上がった拍子に、義手が見えた。

黒衣の男は目を丸くしている。

そうだ。これが当然の反応だ。

こんなものが自由？ 馬鹿馬鹿しい。

こんなのが、本当の自由なわけがない。

「……笑えよ。僕は家族を、みんなを殺したんだ！ この仮初めの自由で、全てを奪ったんだよ！」

「……………」

「何だよ。呆れて声も出ないのかよ」

黒衣の男は言う。

「なら、俺を笑わせる前に——お前が笑ってみせろ」

少年は泣いていました。

それは、少年が抱いていた悲痛の叫びだったのです。

「少年。お前には『誇り』はあるか？」

「……………」

「俺の誇りは、これだ——」

黒衣の男は外套を脱ぎ、誇りを見せてやったのです。

「その腕……」

黒衣の男の左腕は、少年と同じ義手だったです。

「この腕がなければ、俺はここにはいなかっただろう」

男は語る。

「俺には、返しても返しきれない恩人とも言うべき者がいる。俺はいつかそいつを超えることが夢であり、何よりの恩返しだと思っている」

男は訊いた。

「少年。お前はこのままでいいのか？」

「……僕は……」

「体は死んでも、心までは死んでくれるな」
それが、終わりだった。

「グレンハルト。お前の名は？」

そして、始まりだった。

「……クロウ」

これからの全ての。

第十五章 「ティアドロップ」

「そんなことが……」

カイルもエリシアも、クロウのその凄絶な過去に驚き、また、それ以上に恐怖を感じていた。

当然だ。年にしてまだ十二の子供達。知識や世界の現実など知りもしない年頃。

そんな子供達に、この過去は重すぎる。

二人はしばらく、言葉が出せなかった。

どこか、二人に仲間意識を芽生えてきていたクロウ。

そんな二人が、これを聞いて仲間でいてくれるわけがない。

「一時とは言え、僕はお前らの敵に荷担していた。そんな僕を、お前らは仲間と呼べるか？」

呼べるか？ 違う――

呼んでくれるか、だ。

「……クロウ、俺は……」

その時だ。

きゃああああ。緊迫した空気を突き破る悲鳴が届いた。

街を見下ろすグレンハルト。そこには魔造兵器――アンリアル軍団が街を荒らしていた。

その中心に立つあの男――間違いない。

紅蓮の王・グレイシアだ。

カイルは切迫した顔でグレンハルトを睨みように見た。

「オッサン！」

グレンハルト、クロウは駆け出した。

「後につけ！」

魔造兵器の軍団が銃で威嚇射撃をし、街を制圧していた。

その中を悠々と歩く金髪のいかした男・グレイシア。

相も変わらず鈍重な黒い鎧を装備し、洒落た黒いマントも健在だ。グレイシアは炎を纏うその刀を振り回し、時に弾のように火炎を飛ばし、時に鞭のように火炎を振り回していた。

街の修復に当たっていた護衛剣士の中から数名、グレイシアを止めに入ったが、厄介な炎の攻撃で思うように近寄れない。

「当てるなよォ！ 要らぬ噂が立つのは面倒だから」

「くっ……何が目的だ」

「一つは天使。もう一つは、借りを返しに来たんだよ！」

炎の鞭が地に叩きつけられる。石畳の地面が砕け、周囲に大小様々な欠片を飛ばす。

「っ、しまっ……！」

鋭い飛礫と化したそれらが剣士達を襲う。

身動きを止めたそこを、グレイシアが攻める。

「——っ！」

攻めたその先、待っていたのは意外な人物だった。

ぶつかる。鏑。迫り合う。力は互角。

「……ほう、多少はできるようになったようだな」

舐めるように、グレイシアは口にする。

「——少年」

カイルに向けて。

「前みたいには行かねえぞ」

「そう粹がるな。俺はお前に用はない。用があるのは——」

グレイシアは見た。

カイルの背後。そこで避難を呼びかけているグレンハルトの姿を。

「あの男だ……！」

ガシン！ グレイシアは刀でカイルを押した。

「！」

だが、カイルは耐えた。

「言っただろ。前みたいには行かねえってな！」

今度は逆にカイルが刀でグレイシアを押してやった。

不意をつかれたこともあるが、グレイシアは五歩も後ろに下げられた。

「っ、面白い」

それがグレイシアを本気にさせた。

押して、こちらの間合いに入ろうとしたカイルに炎弾が繰り出される。

一発、二発。振り抜いた刃から弾け飛ぶ炎の塊。

カイルは器用にステップを組みながら、右へ左へと相手を揺さぶる。

揺さぶりつつも徐々に間合いを詰め、斬り込める位置にまで潜り込む。

接近すれば、炎弾は自爆技にしかない。

だが、炎弾だけがグレイシアの技ではない。

「その程度で勝ったつもりか！」

刀を垂直に振り下ろす。刀身を渦巻きながら炎の鞭が放たれる。

真っ直ぐ、強靱なストレートが如く。

瞬間的にカイルは刀を一段下げ、守りに入る。

刀で受け止めた炎の鞭。勢いは殺せず、そのまま壊れた噴水まで飛ばされていく。

その間、炎の鞭を直に浴びた鍔に熱が溜まり、カイルは熱さのあまり刀を一度手放してしまった。

「っっ！」

そこを攻め込むグレイシア。一気に間合いを詰めて突撃する。

加速を利用した一撃がカイルに叩き込まれる。カイルはうまく横

に転んで躲し、同時に刀を回収した。水に濡れた鍔の熱はほとんど逃げていた。

カイルはそのままグレイシアの背後を取る。が、グレイシアは刀を後方に振り抜き、カイルを寄せ付けなくした。

立ち止まるカイル。終始燃え続けるあの炎の刀を止めるのは厄介だ。

「どうした、怖じ気づいたか？」

まだグレイシアは全然息が上がってない。余裕なのだ。

「……………」

グレイシアに余裕を与えているもの。力。つまりはあの火炎の天魔。

あれさえ崩せれば……。糸口は見つかるが、それを行う術が見つからない。

「……………」

グレイシアは笑う。

次の瞬間、

「！　しまっ！」

グレイシアはカイルに背を向け、グレンハルトのいるそこへと向かってしまった。

慌てて追いかけるカイル。その時だった。

「甘いんだよ！」

立ち止まったグレイシアが振り返り、追いかけてきていたカイルの腹を斬ってやった。

真横に一閃。ヘソを通る形で。

「ぐあああ……………！！」

焼けるような痛みがカイルを襲う。

傷口を押さえるその手に、じんわりと生温かい液体が――血がついていた。

その苦痛の叫びは、悲鳴が響き合うその中で最も強く響いていた。
「カイル！」

「カイル！」

グレンハルト、そしてクロウもそれに気付く。だが、この混乱する場を離れるわけにはいかない。

どうする——！？

つまり余興だとグレイシアは言った。まるで戦いを切り上げるように。

膝をつくカイルの元へ歩み寄るや否や、彼の腹を思いっきり蹴飛ばしてやった。

「つぐあ！」

されるがままのカイル。浸水した出店に突っ込む。ネックレスやアクセサリーなどの貴金属が水溜まりで音を立てる。

「結局、変わったのはやる気だけ。冷静さが加わった分、余計にタチが悪くなったわけだ」

グレイシアは刀を地に下ろした。呼応するように迸る炎。最大火力の刀がそこにはあった。

「……くそ」

目の前で照りつけるそれを見せられても、カイルには何もできなかった。

だが、刀だけは離さなかった。

そんな滑稽な姿を見たグレイシアがほくそ笑んだ。

「誇りだなんだとバカな奴だ。そんなのが何になる。くだらない精神論にすぎたから、お前は死ぬんだよ」

「……やっぱり違うな」

カイルは言う。

「誇りもないお前とクロウは違う」

グレイシアは遠くにいるクロウを見た。

「なるほどな。アイツの話を聞いたか。いいのか？ あの手はお前

の——」

「——仲間”だよ」

カイルはゆっくりと立ち上がった。足が震える。刀も震える。

「……まっ、いいけどな。叶うことのねえ夢を信じる——バカが死ぬにはちょうどいいじゃねえか！」

グレイシアの猛炎を纏う刀がカイルを襲う……！！

その時。

少年は死を覚悟した。

少女は一粒の涙をこぼした。

少女は少年の名を叫び。

そして——

少年は前を向いた。

「カイル————ッ！！」

カイルは刀を振り抜いた。

「な、なんだ！ その光は……！！？」

カイルが振り抜いた刀。その刀身が眩い光を発していた。

太陽の光を反射したような、激しく、強い、光の刃。

「ダアアアア！！」

猛炎を、切り裂く……！！

「ぐっ！」

押さえ切れない。

光の刃はグレイシアから刀を奪い、そして、腹部に傷を与えた。

「がはっ……！！」

刀を振り抜いたカイル。

その正面で立ち尽くすグレイシアの腹部からは、煙が上がっていた。

ゆっくりと、膝から崩れ落ちる。

ボタン……と、同時にカイルも倒れる。

しかし、その手はしっかりと刀を握り締めていた。

第十六章「明日を見る者たち」

グレイシアが倒れ、それから少ししてカイルは起き上がった。

「っッ」

腹を斬られた痛みがまだ残っていて、刀を杖棒にしてやっと立ち上がった。

カタカタと刀の切っ先が地面で震えている。

「や、やったのか……？」

まだ疑いは晴れない。自分の強さが信じきれてないのだ。

倒れるグレイシアを見ながら、やがて、その疑いは晴れていった。

「やっ——」

心から喜ぼうとした、その時だった。

「ふふふ……」

「！」

不屈の精神が彼をそうさせるのか。酷く負傷したグレイシアが無理矢理に立ち上がってきた。

体はもはや馬鹿になっていて、まともに機能しない。

そんな体を押してでも、グレイシアは刀を構えた。

「ハア……どうした。俺はまだ負けてなどいない。早く刀を構えろ……」

うろ覚えのような口調で、グレイシアは言った。

「やめろ。お前はもう戦えない」

「戦えるかどうかは——この俺が決めることだ！」

グレイシアは刀を突くように構え、カイルに襲いかかった。

カイルにもはや戦意はない。戦うだけの力も残されていない。どうする——迷っていた矢先だった。

「がはっ……」

カイルに到達する手前、グレイシアは口から血を吐いて、躓くようにして倒れた。

傷が開いたのか？ カイルも最初はそう思っていた。
違った。

騒ぎを押さえていたグレンハルト。

「この気は……！」

脇目を振るわずとも分かる、その圧倒的な存在感を肌で感じ取った。

驚愕の眼差しが突き刺すように向けられる。

「――キングアレクセイ！！」

カイルの正面、そこには一人の男が立っていた。

長身で細身の体にフィットする黒い軍服。

同様の軍帽からは、あやめを彷彿とさせる黒紫色の髪。

きめ細やかな前髪の向こう側には、芸者のような艶やかな瞳が構えられていた。

鼻筋は高く、肌は白い。

同性でも美しいと思わせてしまうその男の右手には、細長いレイピアが握られていた。

銀の鉾先に滲む、赤い液体。

間違はなく、グレイシアの血だ。

「……………」

あまりに一瞬の出来事過ぎて、言葉が出ないカイル。

その男、キングアレクセイは低い調子の声で言う。

「部下の非礼を許してほしい」

キングアレクセイはレイピアを振るい、鉾先についた血を払い落とし、脇に納めた。

浸水した地面に血が薄く滲んでいく。

カイルが圧倒されている中、嘘のように騒ぎが止まっていた。

見ると、アンリアルが全て停止していた。

がらんとした空間のその中心、まるで人を寄せ付けぬオーラを放つ男がいた。

足元にまで行き届いた白いロングコート。立てた襟に掛かる透き

通った青白い長髪。高い鼻筋と切れ長の瞳。

見た目は女性的で、落ち着いた印象がある。

「……………」

男は本部を見ていた。

目線を追うと、そこにはエリシアがいた。

「！」

エリシアは下に隠れてしまった。

「……………」

男はキングアレクセイの元に下がってきた。

キングアレクセイは軍帽を深く被り直し、

「後は頼んだよ。ディアス」

すれ違うディアスに耳打ちし、船場へと足を進めていった。

ディアスは周辺を見渡し、グレンハルトの方へ歩み寄っていった。

独特のオーラに充てられた皆々は、ディアスから一定の距離を置いている。

グレンハルトの前に立つと、その脇でクロウが短刀を抜いていた。

「——いい」

グレンハルトはクロウの手前に手を出した。

「話があるのだろう。聞こう」

「この騒動の責任はこちらにある。後始末は——」

「我々の仕事だ。引き取ってもらおう」

「……そちらの意向に従う」

ディアスは背を向け、黒い剣を抜いた。

切っ先から刀身の付け根にかけて、黒い炭のようなものが噴出されている。

それらを振り払うように剣を振ると、停止していたアンリアル軍団が動き出した。

最初は手足を動かす程度の動きで、次第に歩くような状態になっていった。

戦意はなく、船場に向かうディアスの後を列を成して歩いていた。

やがて、敵の姿は全て無くなり、ようやく、セントラルにいつもの平和が戻ったのだった。

008

グレイシア襲撃騒動から一週間が経っていた。

そこは、セントラル本部の療養施設。

昨日の今日まで、この部屋にある十以上のベッドは負傷者で満杯だった。

その中にはカイルはもちろん、クロウも姿もあって。

今は街の修復作業を手伝っている。

しかし、それも今日が最後だった。

景観はまだ元通りとはいかないが、生活に支障が出ないレベルまで――最低限の修復作業を終えた護衛剣士の二人、カイルとクロウは、セントラル直通の駅にいた。

そこには、旅支度を済ませたグレンハルトとエリシアも待っていた。

走行音、蒸気の溢れ出る中に高い汽笛の音色が突き刺さる。

汽車の顔が姿を現すと、ホームで横一列に並ぶそこから、一人、後ろに下がる者がいた。

――クロウだ。

「頑張れよ」

クロウはそっけなく言った。

汽車が止まる。

エリシア、グレンハルトと乗って行く中、いよいよカイルも乗っていた。

そして振り返り、クロウに手を差し伸べた。

「早く乗れよ」

距離にして数センチ。

ちよっと足を踏み出せば、届く距離。

だけど、クロウにとっては永遠のように遠い距離だった。

お前は優しいな……とクロウは聞こえないほどの小さい声で呟く。

「――僕は、そっちにはいけない」

ふと、風が流れた。

違う。

風を感じた。

気付けば、その手を引っ張る手が見えた。

そちら側に引き上げられ、いつの間にか汽車に乗せられていた。

「お前――」

クロウはカイルに怒りをぶつけてやろうとした。

だが、カイルは言う。

「あの時、クロウは俺を守ってくれた」

カイルが言うのは、大男との騒動の時だ。

「そんなやつを俺は敵とは思えないし、呼びたくもない」

本人を前にして、改めて、カイルは言った。

「クロウは俺達の仲間だ」

汽車が動き出す。

「……っ」

ゆっくりとゆっくりと。

「僕に乗せたことを後悔するなよ」

車輪を回して。

「するか、バーカ」

運び出す。

「俺の勘は正しかった」

新たな冒険へと――

海上の波に揺られながら静かに突き進むのは、エクステリアの軍用船である。

そのデッキの先——見晴らしのいい特等席に、キングアレクセイとディアスの二人はいた。

二人は内密に、話を進めていた。

「……いいのですか」

ディアスは問う。

「いいのだよ。私は子供の世話が苦手なんだ」

それに——キングアレクセイは軍帽を深く被り直した。

「君も乱暴はしてほしくないだろう。——同じ天使として」
一瞬の沈黙。

「……体が冷えます。中に戻りましょう」

ディアスを先頭に引き下がる。

キングアレクセイ。

彼の軍帽の下に据えるその瞳は、何を狙っているのか。

第十七章 「竜人族の森の天才考古学者」

西の首都の外れ。

砂漠地帯に隣接された森。

その奥地に人が住んでいるらしい。

ちゃんと家もあって、二人がかりでエンゼルダストの研究をしているのだとか。

昔——まだクロウに会う前の頃だ。

グレンハルトはその考古学者に、一度、会っている。

当時は男一人しかいなかったので、恐らく、新しく助手が加わったのだろう。

最近、新聞に顔が出るようになった天才考古学者がいる。

名前は、サティールアシュレイ。

恐らく、彼女が彼の助手だろう。

汽車を乗り継ぎ、そこから更に船で海へ。

中央大陸から西の大陸へと一日かけて移動した。カイル、エリシア、クロウ、グレンハルトの四人。

長時間の移動でまた騒がしくなると頭を悩まされたグレンハルトだったが、その悩みは全くする必要がなかったようだ。

カイルもエリシアも、そしてクロウも同じ部屋でぐっすりと寝ている。

もしもの時に備え、グレンハルトは甲板で待機していた。

遠く海を眺め、その胸中に思うことは、三人の寝顔ではなく——セントラルで出会ったあの男達のことだ。

砂漠は熱で景色が歪んで見えるほど、暑かった。

おまけに砂漠の砂が体力を奪うし、まさに灼熱地獄だ。

激しい太陽光を浴びながら、カイル達は移動をしていた。

カイルも頑張っている。この猛暑の中、エリシアの分の荷物まで背負っている。

女の子に重い物は持たせられない。特にエリシアは体力がないんだから。半ば男の意地である。

しかし、エリシアはというと、あまり喜んでいない。

汽車の中でもそうだったのだが、エリシアの負担をゼロにしようと、カイルが一人で背負い込み過ぎなのだ。

というのも、カイルの腹の傷をエリシアが力で治療しようとしたのだが、カイルはそれを拒否したのだ。

カイルが言うに、エリシアは何もしなくていいとのこと。

エリシアを思っただけの言葉なのは百も承知だが、それでも誰かの役に立ちたい――守られるだけにはなりたくないのが、戦えない者の心というものだろう。

だが、結局、頑張ったところで足手まといにしかならないのを知っているから、だから、余計に苦しいわけで。

この悩みを解決するのは、まだ遠くなりそうだ。

002

森に入ると、少し涼しくなった。

どうやら、そこかしこの大きい葉が陽を遮っているようだ。

この森は竜人族の森とも呼ばれていて、大昔にそういった部族が住んでいたことも所以の一つなのだが、広くは、その他とは比べものにならないほどの木、そして葉っぱが生えてることで知られている。

森の奥地に進むにつれて、水を打つ音が聞こえてきた。
徐々に激しくなる。茂みを超えるとその姿を現す。
しばしの暗所から解放される。

「滝だ……！」

滝である。

上流より流れてきた川が滝となっている。

川は泳ぐ魚が見えるほどに透き通っていた。

そんな大自然に囲まれた環境の中に、一棟の二階建ての木造住宅が建てられていた。

「あそこにいるんだな！」

ようやく重い荷物から解放される。そんな気持ちからカイルは急ぎ足で家に向かった。

そこに待ったをかけたのがグレンハルト。

「先を急ぐな。カイル」

何かを言いかけるその前に、カイルが――扉を開けてしまった。

「セントラル護衛剣士のカイル・ブリュンヒルデだ……」

その時、カイルが見たものは、一面に広がる天魔の紋章だった。

複数存在するそれらが全て赤く点滅していて。

その畏の先、助手がいた。

赤紫のポニーテール。

ビキニのような黒い上着とジーンズ生地の手短パント。

助手は、敵意むき出しの目でカイルを見ていた。

「クレスト。クレスト。クレスト。クレスト……」

クレスト……倍加の天魔を唱える度に、紋章の点滅は、激しく勢いを増した。

ヤバい。カイルが直感的に背を向けたその時だ。

「――チェック！」

複数の皿が割れた音。紋章が割れ、力を解放する。

一瞬、爆発が起ころうとしていた。

だが、すぐにそれらは消された。地面に転倒するカイル。

「――こちら。大事なお客様に何をしてるんだ。サティ」

二階の階段から、ひょっこりと姿を現した白衣を着た優男。

「いつものやつらだよ、マギ」

よく見なさいというジェスチャーを指で送るマギ。

睨みつけるようにカイル達を見る助手。

「……本当だ」

「本当だ……じゃねえ！」

危うく殺されかけたカイルが立ち上がり、文句を言ってやろうと前に乗り出すが。

「俺は危うく殺されかけ……」

ゴン！

「落ち着け。馬鹿者」

グレンハルトから拳骨をもらったカイルであった。

「いてええええ！」

打たれた後頭部を押さえ悶えるカイル。

改めて。

「お久しぶりです。マギ先生。セントラルのグレンハルトです」

「お待ちしてましたよ。どうぞ。狭い場所ですが上がってください」

第十八章 「ドラゴンキーパー」

「――ふーん、この子が天使ねえ……」

疑い気味のサティ。そんな目で、正面に座るエリシアを見ていた。一階。十畳一間の部屋。その中心には木製机が一つ。椅子は四つある。

その奥――二階へ続く階段の下。レトロなランプに照らされた空間がある。

紙の散乱した長い机。背後には資料がぎっしり詰まった本棚。どうやら研究室のようだ。

クロウとグレンハルト以外の全員は、椅子を使っていた。

「エリシアは天使じゃない。力は持つてるけど……」

「――天使化への進行が進んでるってことね」

カイルを軽くあしらうサティ。偉そうに腕を組んで、足まで組んでいる。

「天使とは、実際に存在していたのですか？」

グレンハルトが尋ねた。

マギが答える。

「過去、天使の生存が確認されていたのは、竜人族が生存していた何千年も前とされています」

「竜人族って？」

エリシアが尋ねると、カイルが自慢気に答えた。

「竜人族ってのは、ドラゴンと人間のハーフみたいなもんだよ。ドラグマ族とも呼ぶんだぜ」

「カイルは物知りだねー！」

「つつても、俺も親父から少し聞いたただけなんだけどな」

仲睦まじい二人の様子を、アホを見るような目でサティは見ていた。

「……まあいいわ。とりあえず、この子を少し調べさせてもらうか

ら……」

と言って、しばらくその場が何かを待つ空気になった。鈍感な男達はそれに気付かず、サティにストレスを与えていた。そして、いよいよそのストレスが爆発した。

「体のことも調べるんだから、男は外に出ろー!!」

男達は慌てて、外に逃げ出した。

003

「――ドラゴンキーパー？」

マギから聞いたその言葉に首を傾げるグレンハルト。聞いたことのない言葉だ。

二人が話すその間、川沿いでカイルがクロウに魚の手掴みを見せていた。クロウには到底真似できない技だ。

「ええ。先程もサティが間違えたのも、実はこのドラゴンキーパーが原因なんです」

「それで、そのドラゴンキーパーとは一体？」

「ドラゴンキーパーは、その名の由来の通り、ドラゴンを守る団体。つまり、竜人族を守る為の団体なんです」

「いまいち研究所を狙った理由がわからないのですが」

「それについては私もわからないのですが、ただ、これは私の憶測に過ぎないのですが、――ドラゴンキーパーにとって、天使は不都合な存在なのかもしれません」

「それは、ドラグマ族にとってということですよ？」

「そこまでははっきりと言えないのですが、先程も話した通り、天使はドラグマ族の前に生存していたとされるので、生態系のバランスを考えた時、ドラグマ族にとって天使とは存在を脅かす存在なのかもしれません。もちろんこれも私の憶測なんです」

グレンハルトは知っている。

かつて旅を共にした仲間の一人、ドラグマ族のラピス。

彼女が言うには、ドラグマ族の存在を脅かしたのは、人間である
と。

少なくともその時、天使というワードは出てこなかった。

（ラピスが生まれるその前に何かがあったということか？）

憶測は憶測に過ぎない。

「いずれにせよ、ドラゴンキーパーには気を付けてください。彼らの強さは、かの有名な英雄、ロイ＝ブリュンヒルデにも劣らないと聞きますから」

第十九章 「ガールズサイド」

「はい。もう着ていいわよ」

と、サティに言われ、エリシアは脱いでた服を着た。

検査に使った器具等を片付けるサティ。その背中に羨望の眼差しを向けるエリシアがいた。

うつとりとするその中に、どこか物足りなさを感じられる。

自身と照り合わせているのか。そこに物足りなさを感じているのだろう。

「何か用？」

検査を終えても残るエリシアに疑問を覚えたサティが本人に尋ねてみた。

エリシアは少し言いづらそうに、しかし、何とか勇気を振り絞って――

「私も天魔を使いたいんです！」

はつきりと主張された目。覚悟は本物のようだ。

「……私が教えろって言うの？」

「サティちゃんのさっきの天魔、凄かったから……」

サティちゃんとは、なかなか歯痒い呼び方をしてくれる。

「エリシアじゃアレは無理よ。重複詠唱……私はクレストと呼んでるけど、クレストは一流の天魔使いでも難しいんだから」

「何で？」

「何でって……」

うーん、と返答に困るサティ。理論的な言い方で説明しても、たぶん、エリシアは分かってくれないだろうから。

「そうね。エリシアは運動と勉強のどちらが得意？」

「どちらも苦手かな」

「強いて言うならでいいわよ。得意な方ね」

「運動のが苦手かな？」

「じゃあ、少しは素質あるかもね。クレストは勉強ができないと駄目なの」

重複詠唱……必要なのは技術ではなく計算。

紋章込みの——言うなれば、完全体の天魔だ。

この完全体の天魔の紋章と、同じ位置に寸分の狂いなく、追加する同じ天魔を重ねることで、威力の倍加や紋章を自在に扱うことができる。

素早い計算力が求められる、高度な発動方法だ。

「でも、その勉強もいっばいできなきゃ駄目。だから、すぐには無理よ」

やはり無理なようだ。しかし、エリシアはどうしても天魔が使えるようになりたかった。その背景には——

「私、カイルやみんなと一緒に戦いたいです」

守られるだけの存在は嫌だ。この強い思いがあった。

「下手に踏み込んでも、足手まといになるだけよ？」

「分かってます。そうならないよう、一生懸命頑張ります！　だから……」

実際のところ、分かってはいないだろう。

しかし、サティは少しは気持ち分かるのだ。

捨て子の後に助手となったサティ。知識も何もなかったあの時、拾ってくれた恩人の役に立ちたい。その思いがずっと抱えていたから。

——分かった気がする。

「いいわよ。教えてあげる」

「ありがとう！　サティちゃん！　私、頑張るから……！」

「ただし、検査結果が出るまでの三日間だけ。それまでに基礎くらいは教えてあげるわ」

第二十章「ボーイズサイド」

「天魔を斬る、か……」

と、興味深くカイルの刀を見るグレンハルト。

クロウが傍らで素振りをする中、話は交わされる。

カイルは先日セントラルでの一件で『天魔を斬った』ことを報告した。

「突然、刀が光ったんだ。そしたらアイツの炎が斬れて」

「達人ともなれば、空気をも斬れると言うが、それとは違う感じだな……。刀は光ってなければ駄目なのか？」

カイルは川に刀の切っ先を通した。

川は流れに沿って進むだけで、何も変化は起きない。

「そうみたいだ」

カイルは証明してみせた。

ふむ、とグレンハルト。

「光は自分では起こせないのだな？」

「ああ」

「そうか……」

この力はいえる。

不足している分の力量を埋めるくらいに。

「オッサン？」

「カイル、その力は、この先、お前の役に立つことは間違いない」

「ああ、わかってる」

「すぐには言わん。——エリシアの調査結果が出るまでの数日間、その間に、何でもいい。——発動のヒントを見つけろ」

カイルに課せられた新たな課題。

「やってみる！」

前を、向く。

「お前とこうして刀を交えるのは、あの時以来だな」

カイルとクロウ。

互いに刀を、己のスタイルで、構える。

一刀流対二刀流。

「あの時は、弱かった。けど今は違う。俺は変わった。強くなった……！」

「なら、見せてみる」

互いに、踏み出す。

「——お前の本気を、僕に……！！」

激しく刀が入り混じる。

鳴り止まぬ金属音。

斬ることの応酬。そして、それを受ける。

攻撃を守りに変えた、凄まじい応酬だった。

「言うだけのことはある」

「……っ！」

互角の力と見えるが、まるで違う。

単純に、倍の攻撃を受け切れなければならない。

しかも、まだ、クロウは天魔を使っていない。

つまり、速度は一定。一般人のそれより少し上くらい。目に追えぬ速さではない。

諸々を含め、カイルは疲労に見舞われている。

「だが、まだまだだな」

カイルは膝をついてしまった。刀を地に落とす。

無理に筋肉を動かしたせいで、痙攣、悲鳴を上げている。手も、足も。

「——まだまだやれる」

悲鳴を上げる体に鞭打って、カイルは立ち上がった。

「……体力はついたようだな」

「おかげさまでな」

「頼もしくなったな。それなら、こっちも本気を出せる」
風が、クロウの体を持ち上げた。

第二十一章「二人三脚」

まだ日もろくに出ていない早朝の時間に、カイルは誰よりも早く起床し、体力作りのトレーニングを始めていた。

山中のきつい傾斜の上り下りを繰り返した後、石の敷き詰められた川沿いで裸足になって素振りをし、その足で川の中を往復する。滝壺に向かって歩いていくのだが、川の流れが体力を残酷なまでに奪い、加えて徐々に底が深まるので、更に比重がかかっていく。天魔を斬ったあの光。アレを出すヒントすらわからないカイルにできることは、考えることより動くことだった。

そうした行為に何の意味もないことは、本人も百も承知の上。それでもやろうとするカイルは、もう立派な剣士と言えよう。不毛な日々は、三日、続いた。

005

三日目の夜。

川沿いでカイルが素振りをしていると、エリシアが近くにやってきた。

カイルはエリシアに気付かず、意を決した彼女から声をかけられて、ようやく気付いた。

素振りを止めて、エリシアを見た。

「どうしたんだよ。こんな時間に」

時間は午前零時過ぎ。

いつものエリシアなら、とっくに寝ている時間だった。

「カイルとお話がしたくて」

そういえば、最近、ずっと話してなかったな。カイルは思い返す。

「……！」

ふと、エリシアの格好が目に入る。

「そんな格好じゃ、体壊しちゃうだろ」

「大丈夫だよ。ここ、あったかいし」

くしゅん、と、くしゃみをしたのは言葉の直後。説得力が根こそぎなくなった。

「待ってろ」

そう言っ、カイルはそこらへんに落ちてる枝を適当に選んで持ってきた。

川の近くにそれらを置いて……

「あ、火……」

焚き火をするつもりだったのだろう。しかし、肝心の火がない。頼りのグレンハルトを起こすわけにもいかないし。

「はは、俺、いつもこう」

半笑いを浮かべるカイルの目の前に、突如、火がついた。小さな火だった。

カイルはエリシアを見る。

「エリシア、それ……」

エリシアは照れくさそうに笑いながら、

「サティちゃんに教わったんだ」

と、自慢してきた。

二人は、小さな火に寄り添うように、肩を並べて座った。

「――へえ、じゃあ、エリシアは天魔の素質があるのか」

「うん。私には天使の力があるから、人より飲み込みが早いんだって。サティちゃんが言ってた」

「いいなあ。俺は、全然駄目だ」

カイルは空を見上げた。

星がある。光がある。だけどそれは、手の届かないところにある。

「俺には天魔の素質がないみたいだ。さっきもそう。先を考えず、目の前のことしか見えていない」

手を伸ばすほどに、遠く――

そんな伸ばした手を、エリシアが握ってくれた。

「みんながいれば、大丈夫だよ」

私、とは言えなかった。

恥ずかしさと照れくささ。それから、言った後のことを考えると。

「みんなで一緒に手を重ね合えば、遠いものも、少し、近くなる」

「そうだな」

「……私、強くなりたい。強くなって、みんなの役に立ちたい」

「なってるよ。もう」

二人の夜は、もう少しだけ、続いた。

006

四日目の朝。

調査結果が出た、と、サティに呼び出された一同。

調査結果を発表する前に訊く――そんな前置きから始まった。

「お前達は、歴史と戦えるか？」

第二十二章「歴史と戦う」

歴史と戦えるか？

その問いかけに、その場にいる誰しもが首を傾げた。

そもそも歴史は生き物ではない。したがって戦う対象にもならない。

が、しかし、グレンハルトは思う。

「それは、虐げられた歴史がある、ということか？」

闇に葬られた問題。それを掘り起こし、解決する覚悟はあるか。ということだ。

サティは小さく頷き、調査結果を話した。

「かつて……竜人族が生きてるより前の時代に、エスカレア一族……私達の言う天使は存在していたの」

「エスカレア一族……」

人並み以上に歴史に詳しいグレンハルトも聞いたことのない名だった。

「だけど、種族間の争いに負けてしまい、その存在を無きものとされた」

ちやうどその頃、人間達による竜人族の虐殺があった、と、サティは言った。

しかし、気になることがある。

カイルはその不思議に思うことを聞いた。

「だったら、何でエリシアは天使になろうとしてるんだ？」
クロウが頷く。

「確かに、そうなれば、エスカレア一族の血を引いているはずだな」
「血液検査では、どうだったんだ？」

グレンハルトの問いかけに、サティは首を振った。

「検査上では、エリシアは人間の血だったわ」

「じゃあ、なんで……」

しばしの沈黙から、サティは、

「エンゼルダストを覚えているわね？」

それは誰もが覚えていることだ。覚えていないほうが珍しい。

「それが、何か関係あるのか？」

「一般的に、エンゼルダストは自然的に起きたとされているけど――」

「けど？」

事実を、覆す。

「エンゼルダストは、人為的に起こされたのよ」

誰もが、想像していなかった真実だった。

言葉を失った。

それは、あまりにも残酷な真実だった。

つまり、エリシアのこの体は、何者かによってされたことなのだから。

失意を塗り潰す怒りが、カイルの心に沸き上がる。

「一体、誰がそんなことを……！！」

「それはわからない。ただ、一つ言えることは、エスカレア一族は今も存在するということ」

「どういうことだ？」

「生物学的に見ても、天使はトップクラスの知能を持つ。それこそ私達、人間を遥かに凌駕するほどにね」

サティは先程の、天使が種族争いに負けた、という話を持ち出した。

「あれは歴史上での事実。実際は、その高い知能を用いて作られた“ある物”の中に避難したの」

「ある物？」

その名は――

「古代兵器“アークステイル”」

それは、一端の学者なら、誰でも一度は聞いたことのある代物だった。

しかし、その存在自体を信用する者はいなく、というのも、不老不死がどうだとか、まつわる話全てが非現実的で、信じるに欠けるからだ。

だが、サティはそれをエスカレア一族なら実現可能と踏んだ。

「偶然にも、アークステイルが滅びたとされる時期と天使の存在してた時期が重なる」

そこまで聞いて、グレンハルトは真意を理解した。

「なるほど。つまり、エスカレア一族は古代兵器に身を隠し、今、あらゆる種族の頂点に立とうとしているわけか」

「少なくとも現時点では、そう考えるのが妥当でしょうね」

しかし、こうも思うのだ。

「けど、そこまでして、エスカレア一族を突き動かす理由がわからないわ」

「俺達、人間にはわからない深い理由があるのだろう」

理由はどうかあれ、エリシアの体はもう変わってしまったのだ。

「それでも、エリシアは確かに犠牲されたんだ……！！」

自分を納得させるように、カイルは思いを吐き出した。

第二十三章「再会」

虐げられた者達がいる。

それらの思いを無視してまでして、エリシアを元の体に戻したいか。

戻したい。戻したいが……

「……俺は、エリシアを助けただけなのに」

頭が割れそう。苦しそうに顔をしかめるカイルを、不安そうに見つめるエリシア。

「カイル……」

本当に一番苦しいのは、自分だと言うのに。

「人を助けることは、そう簡単なことではない」

終着駅は未だ見つからず、きつと、遠くにあるはずだ。

だけど、止まらぬ限り、確かに近づいているのだ。

「今すぐ答えを求めるな。進み続けるその過程で、お前の答えを見つめるんだ」

「俺の……答え？」

「歴史でも世間でもない。カイルⅡブリュンヒルデの答えを見つけるんだ」

「見つかるかな……俺」

天魔の素質もない。

後先考えずに動く。

そんな自分に、答えなど見つかるのだろうか。

わからない。

わからないが、これだけは言える。

皆が——仲間達が言う。

「見つかるまで、俺達と一緒にいてやる」

それは、エリシアがくれたあの言葉と同じだった。

不意に、カイルの表情に笑みがこぼれる。

旅立ちの時がきた。

三日間、お世話になった二人とも、ここでお別れだ。

マギとサティの二人は、森の帰り道手前で、皆を見送ることに。

「次の行き先は決まってるのですか？」

マギは尋ねる。

「まだ決めてはいないが、近くにドラグマ族の仲間がいる。彼女に話を聞いてみようと思う」

その傍らで、サティがエリシアに本を渡していた。

本というより、紙の束だ。

藁半紙のような品質の紙を、ざっと五十枚、頑丈な紐で綴じたものの。

表紙という表紙はなく、一枚目から、図式やらがびっしりと書き記されてある。

「ここに私が覚えてたこと、それから覚えられなかったことの全てが載ってるわ」

「もらっていいの？」

「エリシアの為に作ったんだから、当然よ」

エリシアは、嬉しそうにそれを胸で抱き締めた。

二人を見て、カイルは微笑ましく思っていた。

学校に通ってた時は、女友達がいなかったエリシアが、こうしてプレゼントを貰うまでになるなんて。

俺も頑張ろう。カイルは改めて心に誓った。

その時だった。

「！」

三人の後方に立つクロウが、刃のような気迫を感じた。それと同時に体は反射的に構えを取っていた。二刀流である。

二本の短刀を腰から引き抜き、空振るかどうかの瀬戸際の一撃を振るっていた。

ギン……！！

歯切れの悪い衝突。

直後、クロウの体が川まで飛ばされる。

小刻みにバウンドを重ねて、岩に激突する。

「！　クロウ！」

叫ぶカイル。その後ろに、カイルよりも一回り大きい何者かがいた。

全身を一枚の布切れで覆っているのだが、至る所が破けてたり穴が空いてたりと損傷していて。

刃こぼれする刀を見る限り、かなり戦い慣れしているのが分かる。

「クレスト、クレスト――」

サティが動く。エリシアを投げ捨てる勢いで後ろに下げ、得意の重複詠唱で反撃に出る。

唱えている途中、瞬間的にサティの脳裏に死が浮かんた。

そこで死んでいたのは、自分。紛れもなくサティ自身であった。

重複詠唱なんてしている時間はない。

サティは詠唱を中断し、後ろで尻をつくエリシアの手を掴み、家の中に走っていった。

そこをすかさず、謎の男が追っていく。

退路へと誘導するマギをよそに、グレンハルトが受けて立つ。

刀がぶつかる。体格はほぼ同じ。力もほぼ互角。

が、そのほぼは言葉にするより大きい。

グレンハルトは止めるので精一杯だった。

「何者だ。貴様」

男は無言。すると、言葉の代わりに力を返してきた。

蝋燭に火が灯るように、刀が青く光る。

「！それは……！」

グレンハルトは、それを知っていた。

「離れろ！」

カイルが果敢に攻める。剣士のセオリーを無視した、背後からの斬りかかり。

しかし、いかんせん感情が表に出てしまい、男に気づかれる。

見ての通り、腕前は一流。

だが、男はカイルの一撃を対処できなかった。

できなかったというより、遅れた。迷いが見られた。

カイルの一撃は、男の顔を掠めた。

さらに、と、男の顔を隠す布が切れて外れた。

「……えっ」

カイルは我を疑った。

グレンハルトもまた、同じだった。

その刀技の名は、竜装魔具^{ドラクマ}。

かつて、伝説の刀鍛冶の息子が使っていた刀技である。

「何で、親父が……ここに——」

伝説の刀鍛冶の息子。

ロイルブリュンヒルデ。

子の前に立つ、その父の名だ。

第二十四章「そうだ」

ロイは明らかに雰囲気が変わった。

かつて旅を共にしたグレンハルトが感じるのだから、間違いない。

ロイは、変わった。

変わってしまった。

「……………」

いつか再戦を夢見てきたグレンハルトにとって、その変貌は失望以外の何物でもない。

出来れば、こんな形で再会などしたくなかっただろう。

だが、それは、いや、それ以上に――

カイルは、最初は驚き、後々に怒りが、顔に鮮明に出てきた。

八年前、急にいなくなつて、家をほったらかしにして。

突然、こんなところに顔を出して。

「何やってんだよ！ 親父……！！」

カイルの声は怒りに震えていた。

ロイの表情は変わらず。冷酷に、現実を見るような目をしている。

「答えろ、ロイ。お前が、ドラゴンキーパーなのか？」

「セントラルの仕事はどうした？」

「仲間に任せてある」

「お前がセントラルにしてきたことは、人に任せられるほど軽かったか？」

「それは……」

カイルはロイに詰め寄り、

「ちげえよ！」

自分より一回り大きい父を、下から睨み付けた。

その目には、少し、涙が浮かんでいた。

「オッサンは……グレンハルトは俺達の為を思って！」

不意に、ロイの手がカイルの右肩に触れた。

そして、そのまま左に流される。
カイルが倒れてしまった。

あまりに自然で、何も対応することができなくて、両膝を少し擦りむいた。血が出ている。赤い血だ。

「何すんだよ！ 親父！」

「――お前こそ、何しにきた。何でここにいる。学校はどうした。

人様の娘まで巻き込んで、お前は、何をしている」

皮肉を込めて、カイルは言ってやった。

「親父がしていることさ」

ロイは、ほんの一瞬、黙り込んだ。

「エリスから聞いたか」

ロイは、刀を構えた。鈍い光が青き光の中を駆ける。

「失望したぞ。グレンハルト」

ロイは、グレンハルトを見た。

「どういう意味だ。ロイ」

「もういい。話しても無駄だ。お前達が天使と共にしていた時点で、お前達は、俺の敵となった」

斬りかかる――！

「グレンハルト。お前はもう、俺の仲間じゃない……！」

「！――ッ、俺のことはいい。だが、お前のしていることは、実の息子に血を流させまですることなのか……！？」

「そうだ。だから、俺はここにいる」

刀身に炎が――

「！ そうか……」

相対する色の炎が――

「その言葉だけは、聞きたくなかったよ」

赤き灼熱が――

「少なくとも、お前の口からは」

彼の心情を表すように、激しく、渦を巻く。

「大紅蓮昇華――！」

対極する二つの炎が、ぶつかった。

第二十五章「敵」

グレンハルトの大紅蓮昇華が、ロイを襲う。

ロイは竜装魔具を帯びた刀で、大紅蓮昇華を押さえた。

暴れ狂う大蛇を押さえているような感覚が、ロイの中に眠っていた感情を目覚めさせる。

グレンハルトは、刀を振り切った。黒衣が背中大きく翻り、主の着地に合わせて、元に戻る。

ロイはバックステップを踏み、大紅蓮昇華を躲した。

対象を失った大紅蓮昇華は、大地にぶつかり、激しい爆発を起こす。

ゴオオウ！ と、唸るような轟音から、周囲に灼熱を流し込む。森に生える草木が一瞬にして塵と化し――

「っ！ 離れるぞ！」

クロウは皆に告げ、風の天魔を使った高速移動術で、灼熱から掻い潜るようにして、全員を遠くへ送った。

五十メートルほど離れた付近で、回収した皆を下ろした。

エリシアもサティもマギも、皆が体を震わす中、カイルだけがクロウに突っかかる。

「俺も戦う！」

クロウはカイルの前に立ち、頬を思いっきりぶん殴ってやった。

カイルの体が、砂に埋まる。

エリシアが傍に歩み寄る。

「カイル！」

カイルは半身だけ起こし、口を切った。口の中の血を吐き出し、汚れた手で傷口を拭いた。

「っ……何すんだよ！」

「――足手まといなんだよ」

クロウは、痛感する。

他の誰でもない。

彼が一番、痛感しているのだ。

「お前も僕も……あの二人の前では、邪魔になるだけだ」
恩人の役に立てない自分は——無力だ。

「見ろ」

かつて森があつたその場所は、灼熱に焼き尽くされ、森じゃなくなっていた。

「アレが、お前が向かおうとしてた場所だ」

次元が違う。

光景を見せられ、カイルは、そう感じさせられた。

008

振り抜く。振り抜く。

追い込むように、振り抜く。

グレンハルトからの揺さぶりをかけた攻撃は、しかし、ロイには通用しなかった。

ロイは冷静に、刀で攻撃を切り返していく。

あえて大紅蓮昇華を相殺しなかったおかげで、十分な戦闘領域フィールドも取れた。

一方的に切り返すだけだったロイが、グレンハルトの攻撃を止めた。

押さえつける。これ以上先、進めない。

「……っッ！」

「俺もお前との再戦を心待ちしていた」

思わぬ発言が、ロイの口から出る。

「だが、俺が馬鹿だったよ。この程度のやつに、心待ちをしていたなんて」

ロイは刀の切っ先で、グレンハルトの刀の側面を走らせた。
走らせた跡に、氷が張られていく。

「お前はもう、俺の敵ですらない」

薄い氷のような脆さとなったグレンハルトの刀を、素早く、閃光
のような一撃で、粉碎した。

澄んだ鈴の音に似た音が、儚く、消えていく。

粉碎された刀の破片の先、グレンハルトが胸から血を噴き出し、
倒れてしまった。

倒れたグレンハルトに目もくれず、即座にロイが目を向けたのは

「！」

そこで怯える彼女、エリシアだった。

第二十六章「一人の剣士として」

——走れ！

叫びと同時に、クロウは加速した。

風を纏い、空を切るように、ロイに接近する。

五十メートル以上の間合いを、一直線に、食ってかかるように、目標に向かって。

途中、体に遠心力をかける。

両手にはトンファー。それが羽に見え、まさにプロペラのようになっていた。

クロウを下から突き上げるように、まずは一振り。

惜しい。ロイは半歩引く。

引いた先で、ロイは刀を真っ直ぐ突き刺す。

クロウは、見た。

迫り来る刃の脅威。

刹那の輝き。閃光。

振り抜く——！！

ロイの刀を弾いた。

さすがはグレンハルトが見込んだ男。やってくれる。
だが——

「ここまでだ」

無理強いした動きのせいで、回転が止まった。

墜落寸前。天を仰いだ先には、刃の切っ先が見える。

「っ……」

死を覚悟した瞬間だった。

「クソ親父いいい——！！」

地鳴りのような怒号が、実の息子より届く。

カイルは、もはやデタラメ。力一杯、全力投球するつもりで刀を
実の父に——ロイにぶつけた。

衝突。しかし、弾かれたのは、カイルの方だった。

クロウは余力を振り絞り、弾かれたカイルを回り込んで捕まえる。

「走れと言っただろ！」

「仲間を置いて逃げれるか！」

カイル——言葉は、迫り来るロイより届く。

「剣士は、刀を握ったその時から、もう父も子も関係なく——一人の剣士なんだ」

その時、クロウは我が目を疑った。

幻？ いや、そんな馬鹿なことが——

「だから、俺はお前を一人の剣士として、斬る……！！」
クロウは見た。

竜の幻影。迫り来る巨大な竜の姿を。

「ドラグニル竜孔装騎」

たった一人の人間が、竜に見える。

いや、あれは、正真正銘の竜だ。

「さらばだ、カイル」

蒼き鱗が剥がれ落ちる。

塗り潰すような猛烈な紅が、全身を覆う。

自身を刃に見立て、己が一本の刀と成って。

「——もう二度と会うことはないだろう」

二人の剣士を、斬り裂いた。

第二十七章「魂が集う」

遠くの方から、名を呼ぶ声が聞こえた。

最初は漠然と、徐々に鮮明になる。

そうした過程の先で、カイルは目覚めた。

「……カイル！」

グレンハルトだった。

赤い髪の手、見上げると、夜の帳が辺りを包み込んでいた。

「グレンハルト……」

「意識をしっかりとって」

何があったのか。思い出してみる。

「……！！ エリシア！」

起き上がる。が、雷に打たれたみたく全身に痛みが襲う。立てない。膝をつく。

膝をつき、そうして、全てを理解することになる。

グレンハルト、クロウ、サティ、マギー——傷ついた仲間達の中に、エリシアの姿はなかった。

カイルはさすがのような目で、グレンハルトを見た。

グレンハルトは辛辣な表情。奥歯を噛み締めて、一言。

「すまない」

カイルはグレンハルトの着る外套を掴み、目を見て、必死になつて訴えてた。

「すまないって何だよ！」

傷ついた仲間達を見て、すぐにわかった。

エリシアを守る為に、身を呈して奮闘してくれたことくらい。わかってるつもりだ。

つもりだけ……

「——カイル、俺達は、負けたんだ」

それは、無理な話だ。

一行は傷ついた体を癒やす為、宿に泊まった。

二階建てのログハウス。その屋上で一人、カイルは夜空を見上げていた。

しばらく一人にしてあげよう。そう思い、他の者達は部屋の一室に集まっている。

会話はほとんどない。沈黙が長らく続いた。

時計の針だけが聞こえるそんな静かな空間。グレンハルトは、閉ざしていた言葉を口にする。

「ロイは、殺す気で戦っていなかった」

ちょうどその時、カイルが帰ってきた。しかし、グレンハルトのその発言に戸惑い、しばらく扉の前で耳をすませた。

「どういう意味ですか？」

「ロイが本気だったのは確か。だが、俺達は生きている。いや、生かされていると言っている」

グレンハルトは、こう思うのだ。

「……ロイは何者かに監視されている。だから、手を抜くことはできなかった」

クロウが苦言を呈した。

「僕はそうは思いません。それは、そうありたいと思うグレンハルトさんの願望です」

「願望……そうだな」

痛いところを突かれた。と、グレンハルトは思う。

「正直、待ち望んでいたアイツとの再戦が、こんな形で迎えてしまったことは……辛い」

その気持ちは、カイルもよく解る。

長年会ってなかった父が、こんな形で再会し——刀を交えることになるなんて。

辛かった。

「だが、形はどうあれ、結果は同じだった」

「どのみち負けていたと、そう言いたいのですか」

「そうだ。だから、この辛さは、こんな形で再戦を迎えたことよりも——負けた辛さの大きい」

俺もそうだと、カイルは思った。

こんな形で父と再会したことよりも——いざという時にエリシアを守れなかったことの辛さの大きい。

「アイツには、戦う理由がある。その背景には常に、守りたいと思う存在がいた。それは、願望でも希望でもなく、完全なる真実」

「……僕には理解できません」

「——カイル、お前はどうか？」

「！」

扉越し、カイルは投げかけられる。

「お前はアイツの息子だ。そのお前から見て、アイツは、ロイは何の理由もなく人を傷つけるようなやつだったか？」

違う。即座に頭に浮かんだその言葉。

島での生活。

尻を叩かれっぱなしだったけど、エリスに手を出したことなんて一度もなかった。

足腰の弱い御年配の方の為に、自ら足を運んで、耕作具を直してあげていた。

——扉が開かれた。

「親父は、俺の目標だった」

いい顔をしている。グレンハルトの脳裏に浮かんだのは、父、ロイの顔だった。

息子は父によく似るなどと言うが、そのまんまじゃないか。
立派な剣士の顔だ。

「さっきのグレンハルトの意見、私もそう思うわ」
サティは言う。

「殺す気だったならいつでも殺せた。それなのに殺せなかったのは、
グレンハルトの言ったことが全てでしようね」

「正気か！？ アイツは実の息子にまで刀を向けたのだぞ！？」

「だからこそよ。そこまでさせる理由が彼にはあった」
クロウはやっぱり理解できない。

「僕にはやっぱり……」

「理由は定かではないけど、恐らく、彼の背後には“強大な力”があるのでしょうね」

その時、クロウの脳裏に閃光の如く“それ”がよぎった。

「エクステリア……！！」

——全てが、繋がった。

「カイル。お前は どうしたい？ ここから先は、俺ではなく、お前
が決めるんだ」

エリシアが、そこにいる。

なら、話は簡単だ。

「——エクステリアに乗り込む」
助けにいく。ただそれだけだ。

第二十八章「世界の命運」

一切の光が遮断されたその部屋は、囚われのお姫様には、似合わない部屋だった。

黒揚げ羽蝶のような、不気味な黒紫の部屋だ。

閑散としたその部屋には、中央にキングサイズのベッドが一つ、まさに一国の姫のような贅沢な待遇で構えられている。

しかし、部屋そのものが異常に広いだけに、ベッド一つだけというのは、少々寂しい。

だが、暗澹たるその部屋のお姫様だけは、月明かりを纏ったような純白のドレスを着ていて、相当に輝いていた。

だけど、そこに希望を感じない、むしろ、絶望を多く感じるのは、当然、彼女の格好が部屋に適合しているからではなく――

目が、死んでいるからだ。

短い金髪の前髪の間隙から、暗く沈んだ瞳が見える。

不本意である。

こんな綺麗で高そうな服も、伸ばしていた髪が切られたことも。エリシアが望まぬことだ。

彼女の正面、男が一人、いた。

細身で長身の、狐目の男。

部屋と同じ、黒紫の髪をさっぱり後ろに掻き上げて。

色白で、細長いその指先が、エリシアの顎を絡め取る。

キングアレクセイ。

エクステリアを統べる者。

「怯えることはない。ここは、君の部屋だ。必要なものがあれば、すぐに手配させよう」

「カイル達は、来ているのですか？」

彼女が欲したのは、仲間の安否だった。

「そのような情報は届いていないし、彼等が死んだとの情報も届い

ていない」

——もちろん、生きているとの情報も。キングアレクセイは重々に付け足した。

「帰りたいのかい？」

「帰りたくないと言えば、嘘になります。だけど、これでも私は自分の立場は分かっているつもりです。私は天使の力があって、あなた達はそれを狙っている。だから、私はここにいる」

「……それで？」

「私がカイル達の元に帰れば、また危険な目に遭わせてしまう。だから、今は帰りたくないです」

「ふふ、年の割によくできている」

が——と、キングアレクセイは一つ、疑問点をぶつけた。

「今は、というと、いずれは、ということかな」

「——はい」

はつきりと、通った声。

死んでいた瞳に火が灯る。

命の輝きだ。

「いずれ……か」

キングアレクセイはエリシアに背を向けた。

誰にも聞こえない声で、誰かに言い聞かすように呟く。

「——その時まで、この世界は残っているかな」

第二十九章 「酒場の銀騎士」

エクステリアとの直線対決を決したその夜、戦いの傷を癒やすべく、話し合いはせずに体を休めた。

そして、翌日の朝。

宿を発つまでの残り時間で、カイル達は昨晚と同じ部屋に集まり、今後の道筋について話し合いをした。

渦中にあるエクステリアの本拠地についてだ。

「元々の基地の場所なら分かるが、やめてたからしばらく経つ。場所が変わっているかもしれない」

クロウの提言に、サティが最も同意した。

「むしろ、そう考えるのが妥当でしょうね。相手は数年越しの計画を行っているのだから……、いえ、はずなのだから、どんな細かい動きにでも敏感になっている。アジトの移転は十分にあるはずよ」

「とりあえず、元々の場所も確認はするが……、なければ、振り出しに戻るだな」

顔をしかめながら、グレンハルトは言った。

「そんなこといちいちしてたら、エリシアが危ない。何か他に手っ取り早い方法とかないのか？ 酒場に行って訊くとか」

「そこいらの道を訊くのはワケが違うんだぞ。行っても無駄だ」

「いや、そうとも言えない。酒場の人間は意外と裏側に精通しているからな」

タダではくれないだろうな、と、グレンハルトは言う。

「いいの？ 護衛剣士の隊長様ともあろう方が、そんな“はしたない真似”して」

分かりきった顔しながら、サティは言ってきた。

「手段は選ばない」

グレンハルトは、はっきりと明言した。

カイルは隣に立つクロウの顔を見た。

クロウは両手で耳を塞ぎ、目を瞑っていた。

「……おいしい、クロウ」

「僕は何も聞いてない」

001

朝方にも関わらず、酒場は客で賑わっていた。

見たところ、そのほぼ全員が力仕事をしていそうな、腕っ節のいいタンクトップ姿の中年男達だった。

ジョッキで一気に飲みする姿もなかなか豪快だが、ガハハハ、という野獣じみた笑い声もまた豪快である。

そんな客達は話すら受けてくれないだろう。そう思ったグレンハルトは、カウンター席に足を運んだ。

グレンハルトが座ったのは、マスターのちょうど前だ。店の主が下世話なものを含め、情報を多く握っているだろう。

右には、ブラックスーツの似合う男がいる。なかなか情報を持っているようだ。

そして、左には――

（騎士……か？）

絶世の美女。そんな言葉が浮かべずとも浮かぶ。

黒いドレススーツの上に装備された甲冑は美しい。

胸、肩、脇から腰にかけて守られた、白銀の甲冑だ。

それを完璧に着こなす、飾りと感じさせないそのスタイル。

見た目に似合わず、脇に携えられた白い大剣。

グレンハルトは知れずと、その女性剣士の姿に惹かれていた。

彼女もまた、自分と同じ、情熱的な赤い髪をしていたからだ。

第三十章 「クリムの条件」

グレンハルトはまずは酒を一杯、頼んだ。イースト名産の冷酒だ。小さいカップに一杯、口に含む。

混じり気のない喉越し。乾いた口を癒やす。

さて……と、グレンハルトは小声で意気込み、重い腰を上げて、席を左に移した。

女性騎士は、まだ注文を通してないのか、何も飲み食いしていない。

飲み食いしてから話すというのも相手に申し訳ない。グレンハルトは早々と女性騎士に話しかけた。

「エクステリアという組織を探している」

「ほお、こんな辺鄙な町にとんだ物好きがいたもんだ」

「出来れば、エクステリアの現在の居場所を知りたい。金は出す」
ドン！ と、女性騎士の前に出されたのは、怪物のようなジョッキに注がれた度数高めの洋酒だった。

あまりのギャップに圧倒されつつあるグレンハルト。人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

「金是要らん。負けた方が全額払う。それで行こう」

ドン！ と、もう一つ、今度はグレンハルトの前に女性騎士と同じ度数高めの洋酒がサイズも同じで置かれた。

その隣で居残るイースト名産の冷酒が悲しく映る。

「飲み比べか？」

「悪い条件じゃないだろう。たった数杯、いや、数十杯の酒代で情報が入るんだ。安いもんだろう」

グレンハルトの顔色が明らかに悪い。実は酒に弱いのだ。

「……その腰にぶら下げる物は見せかけか」

「騎士にだって安息の時はある。そうだろう？ ——セントラルの護衛剣士殿」

「！……まったく、とんだ高い買い物をしてしまったようだ」

グレンハルトはジョッキを持ち、女性騎士に向けた。

「グレンハルトだ」

女性騎士もジョッキを持ち、グレンハルトに向けた。

「クリム。クリムゾンⅡウエーバーだ」

自己紹介もそこそこに。

カンツ——と、双方のジョッキはキスをした。

第三十一章「ただでは引き下がない」

バーカウンターでぶっ倒れる赤髪の男がいた。

積まれた空ジョッキーの中でぶっ倒れているのは、あのグレンハルトだった。

セントラル護衛剣士の総隊長。素晴らしい肩書きと実績を兼ね備える彼からは、想像もつかないくらいほどだらない。

彼を尊敬する剣士達。特に、最も尊敬するクロウは、この姿を見たら、死ぬ道を選んでしまうかもしれない。

幸いにも、未成年者という理由でその場にはいないのが救いだ。

そんな酒に吞まれた赤髪の男の隣で、今もジョッキーを積み続ける赤髪の女がいた。

クリムだ。

クリムは未だにペースを落とさず、酒を飲み続けている。

水を飲むような感覚、いや、水でさえここまでは飲めまい。まさに酒豪だ。

ジョッキーを置く。周りのギャラリからすれば、もはや見慣れた光景だ。

脇でだらしなく倒れる男に、まあ、たぶん聞こえてはないだろうが、話しかけた。

「勝負は私の勝ちだ。約束通り、代金は全額出してもらう」

「……金は払う」

グレンハルトは拳を立てて、立ち上がろうとしていた。

体中に酒が回っていて、うまく力が入らない。

仕方なく、というより、情け半分で、クリムは肩を貸してやった。だが、グレンハルトは肩を借りるのを拒否した。手の平を突き出し、自らの力で立ち上がる。

それが、ただのやせ我慢だというのは、手足の震えを見れば、容易に分かる。

「無理するな。体は望んじやいない」

「無理などしていない。それより、クリム。あなたと一戦交えたい」
「なんだそりゃ。新手の口説き文句か？」

「冗談ではない。真剣に、あなたと勝負がしたくなった」

「上っ面で良いこと並べても、本心は情報が目当てだろ？」

「酔いが回って、いまいち頭に入らんのでな」

グレンハルトは、クリムの目を真っ直ぐ見た。

「――仲間になれ」

話にならん、と、一蹴してやるつもりだったが、さすがは名高き
総隊長殿。ここ一番で決めてくる。

思ってたより、なかなか見込みのある男だ。

「――表に出ろ」

第三十二章 「天井知らず」

酒場を離れる。

一際目立つ格好をする二人は、周囲からの視線の的だ。開けた広場に着く。

中心の噴水を除けば、後は十メートル圏内には何もない。

噴水の周りにいた人々も、二人の出で立ちに警戒し、距離を置いていた。

なので、そこは自然と、二人だけの舞台となっていた。

グレンハルトとクリム。

赤髪の剣士と騎士。

騎士であるが故、剣士のグレンハルトからすれば、クリムが何とも戦い辛い格好に見えた。

「鎧は付けたままか？」

「これは、私が騎士である証。――矜持だ」

「なるほど。では、外すわけにはいかないな」

グレンハルトは刀を抜き、正面に構えた。

「だが、だからと言って、こちらが手を抜くことはない」

こういう非公式な場での戦いは、何度も経験してきた。

別格だ。クリムは震える。

こいつはその誰よりも、強い。

「――構わん」

切り捨て、クリムは大剣を振り抜く。

振り抜いた風圧がきめ細やかな砂を掬う。

「そうでないと、こいつが泣く」

新雪のように真っ白な大剣。

「魔剣“デイズⅡキャリバー”」

よろしくとばかりに、振り抜いた魔剣は燃えるように白く輝き出す。

そう、セントラルでカイルが引き出した、あの輝きに似た――

「教えてやろう。この剣は――天使にしか使えない」

鮮やかな踏み込み。

甲冑のリスクなど感じさせない、しなやかな動き。

天使にしか使えない。土壇場でのこの台詞は、真否はどうであれ、グレンハルトに一瞬の疑念を与えていた。

天使だから、あるいは天使じゃないから、戦闘に影響があるわけではない。

しかし、それでも考えてしまうのは、グレンハルトが、人より多く天使に触れてしまっていたからだ。

戦闘においての迷いは、負けを意味する。

負けとは即ち、死。

それが本物であればあるほど、意味は濃くなる。

「こんなものじゃないよな」

ああ、と、グレンハルト。

達人の世界。剣の軌道が驚くほど遅く見える。

刀は自然と、剣を弾き、死の軌道を変えていた。

変えて、逆に勝利を呼び寄せた。

――ッンン！！

大剣が飛ぶ。

空中で逆光を撒き散らしながら、降下。

地に突き刺さるその様は、まるで墓のようだった。

第三十三章「血の繋がり」

激しい頭痛に苛まれながら、グレンハルトは起床した。
宿屋のようだ。

周りには誰もいないが、グレンハルトは極度の酔態によってぶっ倒れたのだ。

ある意味、クリームと相討ちするような形で。

聞けば恥ずかしい話なのだが、そのクリームにここまで担がれたのだ。

見た目も派手な二人が、こんな形でいれば、噂も立つ。

そんな噂を聞きつけたカイル達と遭遇し、ここに至る。

「何てザマだ……」

ぶん殴りたくなるような気持ちを抑えながら、とりあえず、顔を洗いに向かった。

まだ、体の中はアルコールに浸かっている。

002

身嗜みを整えたグレンハルトは、店主に礼を言い、宿を後にした。

「あっ、オッサン！」

「――グレンハルトさん！」

食い気味に、カイルとサティ以外のメンバーが言う。

カイル達は、宿を出てすぐに見つかる。

「手を煩わせてしまったようで、申し訳ない」

まずは詫びを入れた。

「そうだぜ。クリームのおかげだ。クリームが宿まで運んでくれたんだからな」

カイルはやや不機嫌そうに言った。

改めて、しっかりとクリムの顔を見る。

「子持ちかと思ったぞ」

「紹介はあったと思うが、仲間だ」

「知ってるよ」

クリムは言った。

「クリムは私達の動向を探ってたみたい」

サティが言う。

「そうだったのか」

驚きの矢をクリムに突き刺すと、クリムは目を細め、凝視しながら。

「……お前、奇跡で天使に会えると思ってるのか？」

言われてみれば確かに、と、グレンハルトは改めて思い直した。
偶然にしては出来過ぎていると。

「では、何故、俺達のことを……？」

「クリム嬢は、僕と同じ、元エクステリアなんです」

クロウが言った。

「なるほど……。確かにエクステリアに所属していたなら、こちらの動向も分からんでもないか……」

妙に腑に落ちない部分が、グレンハルトの中にはあった。

「では、何故、わざわざエリシアを……」

クリムは天使。天使の力が欲しいという理由だけなら、わざわざエリシアを捕まえる理由もない。

「エリシアでなければならぬ理由がある……ということか？」

「いい線だが、惜しい」

クリムは言う。

「正確には、二十才未満の成熟する前の天使、だ。——私だけではない。ディアスも天使だ」

「キングアレクセイの横にいたあの男が……!？」

「そうだ。現在、生存が確認されている天使は、私を含めたこの三

人のみ。奇跡的にも、その中に血の繋がりを持つ者同士がいる」

「まさか……」

「そう、ディアスだ。そして、もう一人は——エリシア」

この二人は、血の繋がった兄妹、だ。

第三十四章 「少年の答え」

信じられなかった。

「ウソだ……」

思いは言葉に出る。

「ウソじゃない」

そっと包み込むように、クリムは言葉を返す。

それでもやっぱり、信じられなかった。

エリシアが天使で、兄がエクステリアにいるなんて。

カイルには、信じられなかったのだった。

「ウソだ！ エリシアにはちゃんとした家族がいる！」

「ちゃんとした家族って何だ？」

「人間の――」

「家族か。じゃあ、天使の家族はちゃんとしてないってことか？」

「違う！ それは……」

何が違うのか、自分でも分からなかった。

違うという言葉も、とっさに浮かんだ言葉だった。

とは言え、それは、カイルの中の深層心理を表す言葉だったのか
もしれない。

つまり、天使が嫌いだ、ということに繋がるのだろう。

「……力は貸す」

クリムは皆に告げた。

「だが、その前にはっきりとした答えを聞かせてもらおう」

クリムのその言葉に感じた恐怖は、まるで喉仏に剣の切っ先を突き付けられている時のようだった。

「人間を選ぶのか。天使を選ぶのか」

誰も何も言わない。

あえて何も言わなかった。

その答えを決めるのは、カイル。その少年の考えで決めなければ

ならない。

「エクステリアに乗り込むということは、天使と戦うということ。戦いになれば、命ある者は死ぬ。そうなった時、お前は、エリシアの兄であるディアスを、殺すことができるのか？」

「……少し、考えさせてくれ」

「明日だ。明日の日の出までに決断を出せ」

003

アテのない旅人のようにさ迷い続けていると、気が付けば、すっかり夜になっていた。

カイルは一人町を出て、人気のない砂漠の上に寝込んでいた。夜空が見える。

思えばあの日、エンゼルダストを観測した日から、随分と遠い道のりを歩いてきた。

エリシアの体を治したい。そんな一途な思いから始めた行動も、今や、軍。そして、世界規模の話にまで膨らんでいる。

ふと、思い出すのが、サティから聞いた種族争いの話。

あの時、カイルは天使の情が移っていた。

それが彼にどんな影響を与えたのか、あるいは与えてないのかは定かではない。

ただ、カイルは、やっぱりというべきか、子供だった。

だから、こう思ってしまうのだ。

どちらも救う方法はないか、と。

第三十五章「一抹の不安を残して」

明朝午前五時。

ようやく日も差し出した頃、皆は町の外にいた。

カイルは皆を待つ形で、そこにいた。

決意の固まった顔をしている。どうやら答えは出たようだ。

列から一人前へ進む。

カイルの前に、クリムが立った。

物凄い圧迫感。背丈の違いだけではない。騎士としての強さもある。

答えを誤られば――いや。答えは出さなければ、この場で首を切り落としてやろう。そんな気迫さえ感じる。

だが、カイルは吞まれなかった。

その気迫の上に立つ覚悟が、既にあった。

「答えは出たようだな」

ああ、と、カイル。

「どちらも救う。これが、俺の出した答えだ」

鋭い眼光の下、デイズⅡキャリバーがカイルに牙を向く。

数センチ先は、喉仏。

しかし、その状況は――

「これが、現実だ」

人間も天使も同じ。

図らずも、そんな状況に陥ってしまっていた。

「どちらも救うなんてこと、現実では出来ないんだと思う。だけど、せめて、何もしないで諦めるより、何かして諦めたいんだ」

「考えはあるのか？」

「説得させる」

「それでも無理だったら？」

「ディアスを、殺す」

「それが、エリシアの兄でもか？
たった一人。」

唯一残された、血の繋がりだとしても。

「俺は人間に害が及ぶなら、エリシアだって殺す気だ」

グレンハルト。

クロウ。

サティ。

マギ。

「それと、クリム。あんたもだ」

「……なるほど」な

「もうこの問題は、俺一人だけで決めていい問題じゃない。多くの人達が、世界が、明日には無くなってるかもしれないんだ」

カイルの選んだ道は、共存の道。

だが、それがあまりに高い壁であることを、彼自身もよく知っている。

だから、道を違うことがあれば、誰だって殺す。

そう。それがたとえ、自分自身であろうとも。

「その為なら、俺は正面から向き合う」

「……いいだろう」

クリムは剣を下ろした。

一つ遅れて、カイルも刀を下ろす。

カイルに背を向け、剣を鞘に納める。

（その覚悟が直前でブレなければいいんだがな）

クリムは胸の奥で、そう呟いた。

「ところで、クリム。エクステリアの本拠地は、どこにあるんだ？
グレンハルトの問いに、クリムは不意に空を指差した。

謎の動きだ。が、それが全てを示していた。

「――空だ」

第三十六章 「過去からの未来への一手」

海を一望できる丘の先に、カイルはいた。

後ろには、彼を除いた面々がいる。

優しい風を肌で感じながら、その空間に生まれた亀裂を見た。

「本当に、あの先にエクステリアの本拠地があるのか？」

にわかに信じがたい話ではある。

そもそも空間に亀裂が入ること自体、信じがたい話だ。

実際、西の首都から一日と半時の時間を進んできたが、その旅路の間は信じてはいなかった。

今、ようやく目にして、信じてきたところだ。

「元々、あの亀裂は古代兵器が通過した際に生まれたものだからな」

「アークステイルのことね」

クリムは頷く。

「つまり、エクステリアの本拠地は、古代兵器そのものかということになるのか」

「そうだ。現代の製造技術を遥かに凌駕した、天使の頭脳とも言われるべき古代兵器だ。兵器の機能としてはもちろん、その他の設備も完璧に仕上がっている」

元はエクステリアに所属していたクロウだが、その話から想像する古代兵器の姿、存在がにわかに信じ切れなかった。

「僕がいた頃には、そんなものは……」

「水面下で行われていたようだからな。知っていたのは、極一部の人間のみ。再生計画の主は、全てアラベル一人で仕上げたようだ」

「アラベル……」

義手義足。共に痛む。

その名を聞いただけで、気分は俯きたくなる。

「――結局のところ、あの空間に入って大丈夫なのか？」

カイルのふとした疑問に、皆が同意し、頷く。

「大丈夫なわけないだろう。何度も言うが、天使の知能は現代の製造技術を遥かに凌駕しているんだぞ。通常の飛行機や戦闘機で突入でもした日には、機体も何もかもがバラバラになる」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「簡単な話だ。天使である私の知能を使った機体で行けばいい」

「そうか！ それなら行けるな！」

早々に問題が解決され、浮かれるカイルだったが、冷静に考えると、まだ問題は解決されていなかった。

「カイル、物事は冷静に考えるものだぞ」

クロウは呆れ顔で告げる。

「いいか？ 僕達にあるのは、天使の知能と技術だけあって、それを形にする素材がないんだ」

「じゃあ、どのみち、この話は無駄だったのかよ」

「無駄ではない。素材なら原点に戻ればあるからな」

元々の原点――

つまり。

「――エンゼルダストか！！」

第三十七章「凶暴化」

薄暗い洞窟の中に、カイルはいた。

蛇のように入り組んだ道を数十分かけて、最深部まで辿り着いた。奥行きのある最深部には、巨大な獣がいた。

背中に両翼を持った黒い獅子だ。

一軒家にも相当する体格のその頭には、エンゼルダストが埋め込まれていた。

しかも、かなり大きい。今まで見てきたエンゼルダストより何百倍もある。カイルは息を呑んだ。

「ほとんどのエンゼルダストは、エクステリアに回収されているが、まだ幾つか残ってはいる」

クリム曰く。

「正確には、残すしかなかった。――残るエンゼルダストは全て獣達に転移し、手をつけられないほどに凶暴化してしまっているからだ」

どうやら、目の前のこいつが、その凶暴化した獣のようだ。

「それを回収する。ここを切り抜けられないようなら――エクステリアにも勝てないと思え」

クリムの言葉通り、確かに、この凶暴化した獣は、エクステリアと双壁を成してそうだ。

カイルは、静かに刀を抜いた。

腰に低く構え、一点、狙いを絞る。

まともに相手をして勝てない。ならば、狙うはただ一つ――エンゼルダストだ！

カイルは翼獅子に接近した。

腰からの金属が擦れる音、洞窟を駆ける足音。二つの音に反応した翼獅子が、鋭い鋼の爪を生やした図太い右腕で、カイルを切り裂く。

カイルは当たる直前でバックステップを踏み、試しにその右腕に刀を入れてみた。

ズッ……！

やはり通らないか。カイルは体勢を整えるべく、一度、翼獅子との距離を空けた。

刀の刀身を見る。……刃こぼれはしていない。さすがにこちらもエンゼルダストを使っているだけはある。

ただ、既存の刀であれば、間違いなく折れていた。

「どうすれば……」

刀は効かない。

あの光の刀に賭ける手もあるが、現時点で制御ができない以上、望まぬが吉か。

だとすれば、後は――カイルは洞窟の周りを眺めた。

翼獅子には刀は効かない。だが、この洞窟には効く。

逃げ口の確保が難しいが、落石狙いで行くしかない。

第三十八章「翼をください」

カイルは体を横切った。

そこを弾丸の如く翼獅子が突撃してくる。

対象を失った翼獅子の体は岩壁に激突。大砲にも似た強い衝撃が洞窟内に響き渡る。

音の広がり方が洞窟の深さを感じさせた。

カイルは反撃態勢を維持したまま、翼獅子と一定の距離を置く。少しずつ壁沿いを移動しながら、出口へと繋がる細道へと逃げ込む。

翼獅子は凄まじい咆哮に乗せて、カイルを追った。

あまりの反響に胃が震え上がる感覚に見舞われながらも、カイルは正面を突っ切った。

背後で雪崩のような現象が起きているのが音を聞いて分かる。あんな巨体が無理にこんな細道を通ったから、洞窟が崩れているのだ。しかし翼獅子はそんなこと気にもせず、鋼の爪を振り抜き、鋭利な斬撃波で前方のカイルを追い込んだ。

背後がやかましいせいで、風の音が感じられない。

カイルは手前に斬撃波が飛んできているとも知らずに、ただひたすらに前を突っ切っていた。

そこへ不意の一撃が襲う。

「つ……！」

走りかてらに転倒。運悪く当たった個所が右足だった。

翼獅子は止まらない。更なる高音質の咆哮に乗せて、カイルを喰いにかかる。

「ツ——させるか！」

カイルは刀を真っ直ぐ突き出し、誘い込むようにして翼獅子の眼を突き刺してやった。

翼獅子は悲壮の叫びを上げながら、腕を一振り。

腕はカイルの体に直撃し、ボールのように出口付近まで飛ばされた。

体中に極太の鞭でしばかれたような痛みを背負いながらも、這いつくばって何とか脱出。

外の自然の空気を吸って、心を落ち着かせた。

……立てる。

カイルはゆっくりと立ち上がり、洞窟内でもがき暴れる翼獅子に目を向けながら、刀を高く振り上げた。

「立ち止まる訳にはいかないんだ！」

振り抜く……！！

地面に生い茂る草花が大きく道を開く。

ズンッ……！！

洞窟側面を巨体な衝撃が襲った。

瞬間――

あらゆる点の点から亀裂が入り、全ての点を結び合わせた。

積み木で組み立てたパズルのように、脆く、洞窟全体が崩れ落ちていく姿を。

岩石に埋もれる翼獅子と共に見送った。

全てが収束した時、埋もれた瓦礫の中でカイルが目にしたのは、翼を失った獅子の姿だった。

「それが……本当の姿だったんだな」

エンゼルダストという存在の大きさを、改めて知らされたカイルだった。

第三十九章「マギの立場」

凶暴化した怪鳥と戦うサティを見て、マギは思った。

私は、何ができるのだろうか……と。

決して戦闘レベルの高い自分ではない。

現にこの山頂に登る間も、何度も躓いた。

サティほど天魔は使いこなせないし、自分は仲間の足を引っ張っているだけなんじゃないだろうか。

マギという男の半生は、取り分け象徴的な思い出がない。

大学まで進んだ後に、そこで学んでいた古代文明の研究を単独で続け、今に至る。

知っての通り、途中でサティという助手が付くのだが、これがマギの中の強いて挙げての思い出かもしれない。

カイルは偉大な親の血筋を引いている。

エリシアとクリムは天使という特別な血筋を引いている。

グレンハルトはセントラルの総隊長。クロウは将来有望なルーキ
ー。

自分は、大きな血筋を引いているわけでもなく、優れた力を持っているわけではない。

マギは、全てにおいて平凡なのだ。

「——チェック！」

怪鳥が悲鳴を上げ、空中で爆発する。

八倍の重複詠唱による爆発攻撃だ。

厳密には、二倍の重複詠唱の四連鎖によるもの。

二倍の重複詠唱の完了後、ひとまずそれを発動せずに伏せて、また別の二倍の重複詠唱を作る。

これを繰り返すこと計四回。それら伏せておいたものを一気に発動させたことにより、強力な天魔が生み出した。

怪鳥は黒煙に包まれながら、煙の糸を引くように落下。

森林地帯に落ち、バキバキと森林を薙ぎ倒していった。

「やっちゃった。早く降りて回収しないと……」

振り返った先、呆然と立ち尽くすマジがいた。

「どうしたの？ そんな顔して」

サティには分かる。一見普通に見えるその顔が、何か悩みがあることくらい。

「自分に何ができるのか考えていたんだ。——サティは僕に何ができると思う？」

「マジにできること？ うーん……」

考える。凄く考える。

考えに考え込んだが。

「……け、研究と料理くらいかな」

「そ、それだけかい！？」

「だ、だって仕方ないでしょ！ それが事実なんだから！」

「そ、そうか……そうだよね」

サティは、もう一つ知っている。

マジは考え込むとなかなか立ち直れない。

だけど、立ち直った時、マジは必ずいい答えを思いつく。

第四十章「旧セントラル地の戦い」

セントラルに、グレンハルトがいた。

しかし、そのセントラルは、普段見慣れたセントラルとは全く別のものだった。

そもそも、在る場所が地上ですらないのだから。

仄暗い海の底。

欠損一つ見当たらない新築の王宮などが佇む――

「これが……かつてのセントラルか」

数千前のセントラルの姿。

行動を共にするクリムが、傍らから話しかけた。

「メトロドームが起こる前の姿だな」

「メトロドーム……史上最大の災厄のことだな」

「そう。かつて起きた世界の半分を飲み込んだ大津浪。このセントラルもその犠牲となった場所だ」

「その割には外装に傷が見られないな」

「それは、私達も同じだ」

海中で何も無しに呼吸ができる。おまけに海がそこへ導くように割れている。まるで一本の道のように。

「この空間は特別な力によって守られているからな」

「……なるほど。それがエンゼルダストというわけか」

ここにきてようやく納得したグレンハルト。

現在、各自分担して、エンゼルダストの回収をしているが、見ての通り、この場所にだけ二人を向かわせた。しかも、指折りの戦闘能力を持つ二人だ。

グレンハルトは道中、そのことをクリムに指摘していた。

「どれだけの強者かは知らないが、何も二人で行く必要はないだろう」

「ただの強者ではない。正直、私達二人で太刀打ちできるかどうか

もわからないくらいだからな」

「そんなに手強い相手が、本当にいるのか？」

明確な答えを聞かされぬまま、目的地のこの旧セントラル地に辿り着いた。

二人は宮殿の中に入り、中央に位置する謁見の間へと足を踏み入れた。

そこには、不気味に構えられた王座があった。

そして、その王座に腰を下ろしている者もいた。

「！！ お前は――」

黒い燕尾服に身を包んだ、魔術師のような出で立ちをしたその男。

「ヴィンセント……！！！」

かつての首謀者とも言うべきその男の名は、ヴィンセント。

リュウセン島での最終決戦で倒したはずの男が今、エンゼルダストの力を借り、蘇る。

「気を抜くなよ。相手はメトロドームにも劣らない“強者”だ」

第四十一章「最大の通過点」

ヴィンセントに覇気は感じられなかった。

両腕を脱力して、ぶらりと吊り下げている。

グレンハルトは刀を正面に構えた。

「生きているのか？」

視線をヴィンセントに合わせたまま、クリムに問う。

クリムもまた、グレンハルトと同じ視線で、剣を正面に構えている。

「生きてはいるだろう。だが、一度は死んだ身だ。本人の意志はないだろう」

「確かに、今のヴィンセントからは当時の面影が全く感じられない。クリムの見解は正しいと思ってよさそうだ」

「……しかし、そうになると“面倒”だな」

「ああ、ヴィンセントに対する情報は使いものにならなかった。

——俺が奴の攻撃を引き出そう。クリムは天魔で後方から支援してくれ」

「了解した。攻め過ぎるなよ」

「承知」

グレンハルトはヴィンセントに向かって、歩き出した。

その途上、あらゆる攻撃への切り返しを練っていた。

素早く対応できるよう、刀の持ち手も柔軟な構え方に切り替える。

半分まで歩いたところだ。

ヴィンセントに動きはない。

更に先を進んでみる。

刀の刀身を鏡にし、後方のクリムの様子を窺う。

コクン、とクリムは小さく頷く。いつでも支援はできるようだ。

グレンハルトは意を決し、徐々に加速して走り出す。

一步、二歩……と。

スローモーションで映るその世界に――黒い燕尾服が飛び込む。
ドンッ……!!

大型トラックに激突されたような凄まじい衝撃だ。

「つぐはぁ!!」

グレンハルトの切り返しを遥かに越える一撃が、体に打ち込まれる。

「グレンハルト！」

天魔の支援に入る。が、できない。

ヴィンセントの猛攻により、グレンハルトが捕まっているからだ。激しい打撃と蹴りの組み合わせの連続により、グレンハルトはしばらく宙に浮かされていた。

反撃の隙などない。まるで光だ。光のような速さで攻撃が繰り返されている。

「つ……!!」

天魔を使えば、グレンハルトを巻き込んでしまう。

騎士として、目的の為に弱き仲間を切り捨てることは、決して恥じることはない。

だが、今回は訳が違う。

ここが――ヴィンセントを倒すことが目的ではない。

ヴィンセントを倒し、エンゼルダストを回収し、エリシアを救出すること。

それが、目的だ。

だから、ここは通過点に過ぎない。

「作戦変更。クリムゾンⅡウェーバー、出る……!!」

第四十二章「トップスキル」

クリムは大剣を右脇に構えながら、喰ってかかるような姿勢でヴィンセントに接近した。

目標との距離は、十メートル。

クリムの接近に気付いたヴィンセントは、グレンハルトへの猛攻の手を止めることなく、正面から受けて立った。

「……！」

挑発。すんなりと通しても問題ないという絶対的な余裕。

「っ——……」

ああ、わかっているさ。

だから、乗ってやる。

加速を緩めず、クリムは大剣を地に向けて振り抜く。

振り抜く直前、クリムの正面に小さな波紋が浮かんで見えた。

ピンッ、という指で弾かれたような軽い衝撃を額に感じた……

次の瞬間。

体ごと押し返してくる荒れ狂う衝撃波がクリムを襲った。

「ぐあっ……！」

あまりの激しさに対象周辺の石盤が何十枚と剥がれていき、クリムはその中を強風によって飛ばされていった。

十メートルだった敵との距離はスタート地点より奥に戻され、柱に激突したことにより、何とか体は止まった。

砲弾のような強い衝撃を受けた柱が根元より少し上で折れ、左斜め前に倒れていった。

倒れた風圧により、地面で眠っていた砂埃を一斉に起き上がらせ、空中に霧散する。

「飛昇華！」

一瞬の隙をつき、グレンハルトは天魔を繰り出す。急襲系の子天魔だ。

空中より炎が降り注ぐ。一発、二発と。的確にヴィンセントを捉える。

クリムへの反撃と飛昇華の対処を同時に追われたヴィンセントは、ついにヴィンセントの猛攻の手を止めてしまった。

解放されたグレンハルトは地面を転がるように飛び抜け、全身の痛みを振り抜くように、正面に“炎幕”を張った。

敵からの追撃を止めたところで、簡易版の回復系の天魔で、応急処置程度に手足を回復させる。

万全ではないが、これで刀は振れる。

クリムの様子が気になる。が、それ以上は何もしない。すれば、全滅させられる。

目の前の敵は、そういう相手だ。

そろそろ炎幕が切れる頃だ。

（不規則な攻撃に見えたが、実は規則性のある攻撃だった。一連の動作には全てパターンがあり、パターンを把握すれば、止めることは可能だ）

ヴィンセントの攻撃を受けて、グレンハルトは情報を得る。

（そして、こいつは打撃より天魔の方が有効のようだな）

炎幕に食い止められるヴィンセントを見て、グレンハルトは希望を見出す。

（数を打たせ、その間に天魔で反撃する）

作戦は決まった。

後は、クリムを信じるしかない。

第四十三章「女は捨てた」

かつての同僚達は、クリムを見て、常々こう尋ねてきた。
騎士なんてやって苦しくないのか、と。

男性のみのその中で、唯一の花であるクリムが浮いているのは、
至極当然のことだ。

おまけに彼女の腕が達者なものだから、余計にである。
尋ねてくる者は必ずと言っていいほど、同年代の女性を引き合い
に出してきた。

確かに、クリムのような年頃の女性なら、恋愛の一つや二つ経験
していてもおかしくない。

だが、それは、クリムにとってはいらぬことなのだ。
何故か。簡単な話だ。

彼女は騎士という人生の名のもとに生きているからだ。
全ての前提には騎士があり、それを越さぬ限り、それ以上はない。
洒落た服など着ても、騎士の為には何も役立たない。
愛情など以ての外。戦いの邪魔になるだけ。

乳房を切除したいとさえ思い詰めていたクリムの騎士たる道は、
相当な覚悟が窺える。

団を抜けて、独立しても、その覚悟は変わらない。
そして、今も――――。

グレンハルトが一人、戦っていた。
クリムは離れたその場所から、その戦いを見ていた。
長年の騎士の経験が、その戦い方に違和感を見出す。
違和感の正体は、キレのなさ。

今のグレンハルトの戦い方には、いつものキレがない。
恐らく、規則的な攻撃に規則的な攻撃で合わせているため、キレ
がないのだ。

見たところ、合わせているというよりは、合わしている。

強敵を相手に、わざと腕を落としているのは、何か理由があるからに違いない。

「……！」

天魔か。

敵の衣服に僅かな焼けた跡が見える。

グレンハルトが使ったのだろう。

そしてそれは、有効だった。

グレンハルトは敵の動きに合わせている間に、天魔を練る。

練った天魔で、確実な一撃を与える。

それが、グレンハルトの作戦だろう。

なら、やることは決まっている。

「天魔は、元は天使の力。見せてやろうじゃないか。なあ……——

“デイズⅡキャリバー”」

第四十四章「踊らされるもの」

クリムが走った。

グレンハルトと交戦中のヴィンセントの背後に回り込む。

走りながら、大剣に炎を纏わせる。

対象との距離を五メートル圏内まで捉える。

走行を止めず、勢いそのままに大剣を振るった。

大剣に纏う炎が飛ぶ。鳥のような甲高い叫びを上げて、対象の背中を爆撃する。

振り払うようにヴィンセントは背後を攻撃する。が、クリムは一段下にしゃがみ込んでいた為、当たらない。

同時にグレンハルトへ背を向けた為、炎の天魔で狙い撃ちされた。ひるんだそこにすかさず、クリムの一太刀が入る。炎を纏う大剣が脇腹を抉る。

二人はそこから、ヴィンセントへの猛攻を開始した。

交互に、手を取るように。

まるでワルツを踊るように。

初めてとは思えない息の合いようで、攻撃し続けた。

二人の攻撃にはまったヴィンセントは身動きがとれず、反撃がでない。

猛攻の最中、二人の背中がぶつかる。

狙いは一点。双方の切っ先と瞳が捉えるのは、ヴィンセント。ただ一人。

瞬間――

ヴィンセントの体に一筋の閃光と炎が走る。

「「紅蓮閃刃……!!」」

走り抜いた先、グレンハルトとクリムの二人が各々の武器をクロスさせていた。

ほんの僅かな間が空いた後、ヴィンセントの体が高々と炎上した。

二人が振り返ると、そこには身長の倍はあろう火柱が上がっていた。

「とっさにしては上出来だ」

「誰に物を言っている。それでも私は元騎士——」

その時。

何故、それに気付けたのかはわからず。

それ以上に。

何故、脇の男を庇いに行く自分がいたのか。

分からなかった。

——……ッっ!!

滴る真っ赤な体液。

「クリム……」

それを伝う——己の硬質化した刃にも負けない皮膚。

「クリム……!!」

肺を負傷し倒れるクリムの元に駆け寄ったグレンハルト。

目の前の絶望とは別に、もう一つの絶望を目の当たりにしてしま
った。

ヴィンセントは全身に纏う炎を食らい、傷を癒やしていたのだ。

天魔が弱点ではない。

全ては弱点と見せかける計算された行動だったのだ。

負傷するクリム。

ほとんど力を出し尽くしたグレンハルト。

策や知恵はなく。

この戦い——

生きて帰ることは、もうできない。

第四十五章「愛しきもの」

酷い傷だ。

皮膚は破かれように引き裂かれていて、肉は掻き乱されたように渦巻いている。

骨の接合部が見えるくらいに深手を追っていて、やってはいるが、グレンハルトの治療系の天魔では治りそうにない。

その治療に充てた時間だけ、クリムの症状が悪化している。呼吸は常に安定せず、恐らく、毒が侵食しているのだ。

「――私はいい。お前だけでも退け」

毒に苦しまれながらも、クリムは伝えた。

「もうじき、ここも見つかる。時間の問題だ。早く行け」

グレンハルトは諦めなかった。

治療を続けた。

「無駄な体力を消費するな。切り捨てろ」

「喋るな」

「使えなくなった仲間を、いつまでも生き晒すなど言ってるんだ！恥をかかせるな！」

傷口が痛む。血が噴き出る。噴き出たそれがグレンハルトの頬にかかった。

流れる汗が煤を溶かし、やがて血と混じり合った。

グレンハルトは血を拭うことさえ忘れて、真剣に戦っていた。

「負けたことが恥か」

「そうだ。お前も剣士ならば分かるはずだ」

「……分かんない」

「……！……私は失望したぞ、グレンハルト。お前が、その程度の男だったとはな」

「――剣士だから、騎士だからなんだ？　だから、死ぬのか。一度負けたくらいで、死ぬつもりか」

グレンハルトは立ち上がった。

治療を止め、その刃を、クリムに向けた。

「失望したのはこちらの方だ、クリム。お前が、それ程までに弱い女だったとはな」

「それでいい。弱い人間は切り捨てろ。味方の屍を踏んでも、前に進め。目的を見失うな」

「……毛頭、目的など見失なってなどいない」

グレンハルトは、刀を捨てた。

腰を下ろし、刀を捨てたその手で、クリムの顎を支えた。

顔を近づけ、ゆっくりと唇を寄せて――

重ね合わせた。

「……！」

唇を離し、抗うその目を見つめ、もう一度、唇を重ね合わせた。

クリムはグレンハルトの腹を蹴り飛ばし、突き放してやった。

唇を拭い、唾を吐き捨て。

「ッ……何をやる！」

「ここが終わりではない。ここから先、俺達は進まねばならない」俺達。

その言葉が差す意味を、クリムは瞬時に理解した。

脳裏に映る仲間達の顔を見て。

「それでも生きる目的が見出せぬなら、俺がお前に生きる目的をくれてやる」

グレンハルトは志気を高め、叫んだ。

「――俺の女になれ、クリム！」

いつからだろう。クリムは思い出していた。

いつから私は女を捨てようと思い、皆は私を女と見なくなったのだろう。

分からない。分からないが――

この遠く故郷へ帰ったような温かい気持ちは、久しく懐かしい。

「…………ふっ」

懐かしくて、おかしくて、涙が出る。

なるほど、これが“人を愛する”ということか。

「よくもまあ、この状況下でそんな台詞が吐けるものだ」

「どうやら俺には、こういうやり方しかできないようだ」

「……まっ、いいだろう。お前を私の男にしてやる。覚悟しておけ」

「私の男か……。ふっ、先が思いやられる」

001

ヴィンセントの前に、グレンハルトが現れた。

自ら姿を晒し、勝負に打って出た。

策は知らない。知るつもりもない。ヴィンセントは速攻で襲いかかってきた。

グレンハルトは構える。恐らく型を変えてくるだろう。

自然に身を任せ、グレンハルトはヴィンセントが繰り出す拳技と蹴り技の連続を、さも知っていたかのように躲けていった。

「どうやら、お前には相当な速さでの再生能力があるらしいが――ならば、その再生能力すらも追い付けぬ速さで攻撃されてはどうなるか」

グレンハルトの体が僅かばかり浮遊していくのが分かる。

風の天魔だ。

そして、この応用の仕方は――

「その身で確かめてもらう」

クロウ。彼の技だ。

風を纏うグレンハルトは、その素早い動きでヴィンセントに迫り、最大限の力で切り裂いていった。

猛烈な速さに加え、炎という己の象徴が重ね合い、風を浴びたその炎は更なる飛躍を遂げる。

「俺達は——先へ行く！」

バキン……！

ヴィンセントの硬質化した皮膚を、心臓を貫く。

「立ち止まるわけにはいかない」

002

「カイル達が持っていたエンゼルダストより何倍も大きいな……」

互いに深手を追いながらも、グレンハルトとクリムは、無事、生存することができた。

帰路を歩みながら、その手に持つ巨大なエンゼルダストの話をしていた。

「それだけ力も強大だったというわけだ」

「確かに、俺とクリムの傷も、何もしていないのに自然治癒されているな」

「天使とはそういう存在だ。私も戦いまでには完治できるだろう。」

——それよりお前、忘れてはいないのだろうな」

「忘れるわけがない。月並みなことしか言えないが——君を大事する」

ふと、空を仰いだ。

「まったく、あの場面であんな台詞を吐くなんて、私が知っている映画だったら死んでいたところだぞ」

「だが、こうして生きている」

「ああ、そうだな」

だから、お前はもう死ねないな。

第四十六章 「マギの答え」

それぞれが無事、エンゼルダストの回収に成功し。

集合場所に指定していたセントラルで、回収したエンゼルダストを使い、戦闘機を造る作業を行った。

担当は、クリム。高い知能と技術力を持つ天使である彼女が造る。厳密には、彼女しか造れない。

天使が造った戦闘機だからこそ、エクステリアの本拠地——アークステイルへ繋がる亀裂への突破が可能なのだ。

製造作業は三日続き——四日目の朝。その日はきた。

003

突然の発表は、その日の朝に本人の口より告げられた。

「な、何言ってるの……マギ？」

セントラルの船場。幾つものコンテナが並べられるその場所には、完成した戦闘機があった。

形こそ戦闘機の成りをしているが、操縦方法からその他のシステムに至るまでは、まるで現代の常識を無視している。

本当に飛べるのか——という不安もさることながら、今現在のカイル一同の悩みは、本当に飛ばせるのか、だった。

そのままだよ。マギは自信に満ち溢れた声で言う。

「僕が皆を基地へ運ぶ」

突然の発表とは、このこと。

つまり、マギが戦闘機を操縦すると言ってきたのだ。

当然だが、その運ばれる皆の反応はよくない。

「我々、人間が操れる代物ではないと聞いた上での発言ですか？」

マギ先生」

「そのつもりです。グレンハルトさん」

「マギ先生……」

グレンハルトは悩んだ。

はつきりと苦言を言うべきなのか。仮に言ったとして、それで皆の志気を下げる行為に繋がらないか。繋がるとしたら、あえて苦言は避けるべきなのかもしれない。しかしそうなれば、マギ先生に操縦を任す流れとなってしまう。

「――目的を見失うな。グレンハルト」

悩むグレンハルトを一喝し、クリムはマギを見た。

「迷惑だ」

はつきりと告げる。

あまりに直接的過ぎて、他の皆が逆に驚いていた。

「あながち、自分は何もできないなどと追い込み、その末に出た苦肉の策と言ったところか。――私には、逃げ道に迷い込んだようにしか見えんがな」

意見の全てに同意したとは限らないが、少なくともベクトルは同じだったようで。

誰一人、意見に否定はしなかった。

マギもこれで精神が弱い。決して打たれ強くはないので、今の一言でも十分に堪える。

「……ふんっ、この程度で何も言い返せんくらいの意気込みだったとはな。よくもあんな顔をできたものだ」

「クリム。これくらいにしてあげて。……マギだって、本心では分かっているはずだから」

「分かってこれなら尚更だな」

まあいい。クリムは気持ちを仕切り直した。

「何もしないより何もできない方が、まだ見込みはある。――が、戦闘機の操縦は、予定通り私がやる。マギはここに残れ。お前ももう十分“戦った”」

「！」

「――この中にいることを誇りに思え」

胸に突っかかっていたものが外れた気がした。

マギは自信に満ち溢れた、別の顔をしていた。

「僕はここに残ります。そして、皆さんの帰りを待ちます」

「いい答えだ。――よし、では、行くとしよう」

エリシアの元へ……！！

第四十七章 「新たな伝説の幕開け」

アークステイル最上階。

暗闇に包まれた大型ステージに、キングアレクセイはいた。

世界を映し出す鏡をバックに、男は剣を抜いていた。

妖艶な眼差しとその剣の鋒先には――ロイがいた。

キングアレクセイの立つ壇から、五段の薄い階段を挟んだ先に、

ロイは立っている。

両者との間隔は、十メートルもない。

だだっ広い空間には、この二人以外、誰もいない。

空間より外へ視野を広げれば、さすがに監視役はいる。

それでも二人だ。手薄と言えば手薄である。

ロイがこの場にいられるのは他でもない。キングアレクセイと繋がりがあからだ。

いや、あったから、か。

たった今、繋がりは切れた。

「話が違うぞ。キングアレクセイ！」

向けられる刃が、その崩れた関係を意味する。

「エリシアの力を借り、ラピスの仲間達を蘇らせる。俺はその為に

お前に力を貸した」

なのに……。己の未熟さに腹が立つ。

「お前はラピスもエリシアも――大陸にいる全ての人達を犠牲にしようとしている！」

どういうことだ。ロイはキングアレクセイに問い詰めた。

「こういうことだよ。ロイ＝ブリュンヒルデ。伝説の男よ」

「……ッ、騙したのか」

「騙したのではない、騙まされたのだ。君が――この私に」

「キングアレクセイ……！」

漆黒の稲妻が脇を突き抜ける。

ロイが刀に手を掛けた、僅か一秒のその時だった。
暗い赤のカーペットが、真っ黒に焼け焦げている。

「……天魔か」

「天魔などではない」

キングアレクセイの持つ剣が、鼓動を打つように邪惡に光る。

その邪惡な光は、持ち主の体全体にまで行き渡り、妙な威圧感と存在感を放っていた。

「お初にお目にかかる」

「そのオーラは……竜装魔具の……!!」
ドラクマ

「邪竜煌剣。竜人と天使の力を融合させた——究極の竜装魔具!」

「……ッ、凄い力だ。ラピスの力より何十倍も強い」

（氣をつけて。天使は最強の種族。その天使と竜人族の力が融合されているんだから——神を相手する気持ちでやって）

「……ふふ、神か。あながち間違っではない」

「! ラピスの声が聞こえるのか!？」

「この究極の力を手にした今、相手の思考を読むことなど造作もない。——故に、如何なる攻撃も私の前では“無”と化す」

ロイは実感する。

数々の強敵と相見えてきたが——この男はその誰よりも桁外れだ、と。

「さて、伝説の男を打ち取り——新たな伝説の幕開けとさせてもらおうか」

第四十八章「力量の差」

勝負は突然、始まった。

先攻後攻は無視。両者が一斉に同時に攻めに転じた。

正面でぶつかり合う。高い金属音が突出した後、今度は不快な歯軋りのような音が、両者譲らぬ鏢迫り合いより起こる。

力は互角。互いに一步も引く気配はない。

空気を断ち切る。先に仕掛けたのは、ロイだ。

鏢迫り合いに制し、そのまま流れるように体を上空へ。

キングアレクセイの頭上を越え、背後を取る。

着地。すかさず攻めの態勢に転じるも、そう易々とさせはしない。キングアレクセイは剣より漆黒の稲妻が迸る。モーション抜きでの攻撃は初めてだ。

ロイは攻撃を諦め、漆黒の稲妻から距離を置いた。

生き物のような動きをする漆黒の稲妻を背に抱えつつ、一定以上の距離を置いて、次の攻めに移れるよう、キングアレクセイとの距離を詰める。

結局、相手に飛び道具がある以上、遠距離戦での勝ち目はない。

攻めるしかないのだ。

攻めて攻めて攻めて攻めて――攻め続ける。

そうでないと、こちらがやられる。

「キングアレクセイ！」

死角から、刀を振るう。

死角から、キングアレクセイの剣が飛び出る。なんと柔軟な男だ。常人なら無茶なその態勢。しかし、ロイはそれ以上、刀を押せなかった。

「……っッー！」

当然だが、力を抜いているわけではない。

単純に、力量の差。

残酷なまでの、現実。

「伝説とは名ばかりだな」

キングアレクセイは己を軸とし、独楽のような回転をし、ロイを打ち払った。

「……ッ、重い！」

遠心力の加わった一撃は、およそ刀一本で支えられる力ではない。後ろまで戻されたロイ。背後より、逃がしていた漆黒の稲妻が襲いかかる。

「ぐっ！！」

傷は浅い。だが、脚の腱の部分をやられた。何たる不幸。次の動作に移れない。

キングアレクセイは、攻めに転じた。

ロイが動けないことを皮切りに、嵐のように漆黒の稲妻を放ち続けた。

「ぐああああ！！」

直撃する度に薄闇の煙が規模を拡大していく。数分間の地獄が、終わる。

刀を、支えとする。ロイは膝をついてしまった。

体中、傷だらけだ。よもや息することすら厳しい。

キングアレクセイが、迫る。

「さらばだ。——伝説の……！！」

突き出した剣の先端が、ロイの胸を貫いた。

（ロイ……！！）

そのまま、背中で窓を突き破り、地上——。

一千人の兵士が群がる戦場に、落ちていった。

第四十九章「兄と妹」

幾重にも折り重ねられた天魔の円環は、青く神秘的な光を放っていた。

円環の中には、エリシアがいる。

球体の形をしたこの中は、満杯の水が入っている。

呼吸機器などの類がなければ、人ならば窒息死する。

しかし、エリシアは何も付けずにいた。

ちゃんと、息もしている。

エリシアには、それが不思議でならなかった。

つい数時間前までは。

それまでアラベルと呼ばれていた男に監視されていた。

その時、アラベルがクロウが言っていた人物だと思い出す。

アラベルは特別、こちらに危害を加えることはなく、たまにこちらの様子を伺うだけだった。

聞いていた人物像よりおとなしい、という印象を受ける。

そんな何とも言えない二人だけの時間が一日二日と続き、いつでもこうしていいのかと思い始めたその頃。

ディアスが、現れた。

エリシアが彼と出会うのは、これで二度目。

むこうは覚えていないだろうが、セントラルでの騒動の際、見かけてはいる。

当然、話など交えたことはない。

そんな人が、何故……？

エリシアの脳裏には、最初、その疑問がよぎった。

ただ立ち寄ったのではなく、任務というわけでもなく、会って話
がしたいという理由だった。

最初こそ会話はなかったが、少しずつ始めていった。

そうしていく内に明かされたのが、お前は俺の妹である、という

衝撃の事実。

その事実を聞く前、エリシアはディアスが天使だと聞いていた。その事実が本当なら、私が本当に天使である、という事実の結び付きになる。

つまり、真実になる。

疑っていたが、この自分自身を取り囲む機械。この機械が、純正な天使にしか適合しない、特別なものだと言われ、信じざるを得なくなった。

わかってはいた。自分が人より違うことくらい。

傷の治りも早いし、天魔を覚えるのも早かった。

信じたくなかった。

カイルと一緒にいたいから、自分が天使だと認めたら遠くへ行ってしまう気がしたから。

信じたくなかったのだ。

エリシアは泣いた。

溜め込んでいたものを一気に放出した。

今の今まで、ずっと泣いていた。

だが、もう泣いてなどいられなくなった。

ディアスが残した――

「k a u n d a p m a」

天使にしか理解できない言葉を聞かされて。

「カイル……、みんな……！　お願い――」

お兄ちゃんを助けて。

第五十章 「信じる意味を知る戦い」

何もない空間から、突如として小型の戦闘機が出現した。

先端から正面を突き破るように、さながら強引に突破したように現れた。

カイル達の乗る戦闘機だ。

着いたのだ。エクステリアの基地に。

見下ろせば、広大な大地がそこにはあり、数百、いや、数千の兵が待ち構えていた。

その全てが、たった一つの兵器の中に収められているのだから驚きだ。

「本当に基地なんだな……」

当たり前のようでそうでない感想をカイルは口にした。

「そうだ。ここはもうエクステリアの基地——本拠地だ……！」

地上にいる全ての兵が、天魔を介した弓矢を構える。

一斉に射撃態勢に入る。

狙いは一点。

上空の、侵入者達。

「撃て——っ！！」

その叫びが合図となり、天魔を帯びた幾千の矢が、カイル達の乗る戦闘機に一斉に迫り来た。

「各自、落とされるなよ」

言われた通り、各自、定位置前方の椅子などにしがみつき、身構えた。

操縦士のクリムは、操作盤に全力の天魔を注ぎ込んだ。

すると、戦闘機の周りに巨大な天魔のボールが生まれた。

戦闘機が加速する。

迫り来る矢の群れを、超高速による突撃で粉碎していく。

降下するにつれて、地上にいた兵士達が悲鳴を上げながら、無傷

の場所に避難した。

避難により開いたその場所に、戦闘機は降下した。

大地を抉りながら、滑り込むようにして。

着陸点から数千メートル離れた先で、戦闘機は止まった。

「つつ……無茶し過ぎだ」

腰を押さえながら、グレンハルトが戦闘機から降りてきた。

「無茶などしていない。……が、お前たちが天使でないことを考慮するのは忘れた」

次いで、クリムが降りてきた。

「コレの頑丈さが身に染みて伝わるわ」

「まったくだ」

サティ、クロウと続き。

「ごちゃごちゃ言っても仕方ない。もう後戻りはできないんだからな」

カイルが、戦場に立つ。

志気を上げ、迫り来る幾千の兵士達。

カイル達の顔つきが変わった。

「――正面を突っ切るぞ！」

かくして――

エクステリアとカイル軍の、戦いの火蓋は切られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9499s/>

伝説の刀鍛冶物語外伝～刀を継ぐもの～

2011年12月17日02時29分発行